

宮城県仙台市

# 和田織部館跡

— 平成26年度蒲生北部地区被災市街地  
土地区画整理事業関係遺跡発掘調査報告書 —

宮城県仙台市

# 和田織部館跡

— 平成26年度蒲生北部地区被災市街地  
　　土地区画整理事業関係遺跡発掘調査報告書 —

2015.3

仙台市教育委員会





調査区全景遺構棲出状況（西から）



調査区全景遺構棲出状況（南東から）



調査区全景遺構棲出状況（東から）



調査区全景遺構完掘状況（西から）



調査区全景遺構完掘状況（南東から）

SD2堀跡出土青磁連弁紋碗  
(第14図3・J-7・S=1/1)

## 序 文

仙台市の文化財保護行政に対しまして、日ごろからご理解、ご協力を賜り、誠に感謝申し上げます。

ここで報告しますのは、蒲生北部地区画整理事業に伴う和田織部館跡の発掘調査の成果です。

和田織部館跡が所在する蒲生北部地区は、仙台市北東端に位置し、仙台港フェリー埠頭から南西に約1.8km、標高は約1～2mという地理的条件により、平成23年3月11日に発生した東日本大震災により津波等の甚大な被害を受けました。仙台市では本地区を災害危険区域に指定し、住宅については防災集団移転促進事業を進めています。移転後は早急な都市基盤の再整備を図るため、「蒲生北部被災市街地復興土地区画整理事業」が計画されました。事業地内の都市計画道路や主要道路の一部が埋蔵文化財の包蔵地の範囲内であることから、平成25年度に確認調査をし、その結果を受けて平成26年度には本調査を実施しました。

和田織部館跡は、これまで本格的な発掘調査はされていませんでしたが、遺跡の西側を中心に土塁と堀跡が地表に顕在していることが従来から知られておりました。伊達家の家臣である和田氏との関係性から近世の館跡として遺跡登録がなされていました。また周囲には和田新田、小字名として屋敷、西屋敷添、東屋敷添などの地名も残っています。今回の調査では和田氏の時代の造構だけではなく、古代の造構や中世の焼き物なども見つかりました。和田織部館跡はこれまで認識されていたよりも長期にわたり人々の生活の場として利用されていたことが判明したことは、非常に大きな成果であります。

当地区も含め、被災地では今なお復旧・復興に向けて様々な事業が行われております。このような状況の中で発掘調査が出来ましたのも、市民の皆様や先学の諸氏のご理解ご協力があったからだと感じております。特に調査を実施するにあたりましては、地元の和田町内会を始め、多くの方々から様々なご支援と励ましを頂きました。ここに記して厚く御礼を申し上げます。

今後とも被災地の早期復旧・復興がはかられ、市民生活の回復がなされるとともに、今回の調査が地域の歴史の解明の一助になり、私達の生活文化に寄与することを願ってやみません。今後とも地域の歴史と文化財を守り、後世に伝え続けていくために、皆様のご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成27年3月

仙台市教育委員会

教育長 上田 昌孝

## 例　　言

1. 本書は蒲生北部土地区画整理事業に伴う和田織部館跡発掘調査の調査報告書である。
2. 本書の執筆は以下のように分担した。  
第1章　及川謙作　石山智之  
第2・3章　及川謙作
3. 本書の作成に関わる作業は、以下のように分担し、編集は及川謙作が行った。また遺物の整理は、中・近世の遺物に関しては調査調整係：佐藤洋専門員、弥生土器に関しては調査指導係：荒井格主査、主浜光朗主査の協力のもと、及川が行った。  
図版作成：及川謙作　石山智之  
遺物観察表・遺構註記表作成：及川謙作　石山智之  
遺構・遺物写真撮影：及川謙作
4. 本書に係わる出土遺物、実測図、写真などの資料は仙台市教育委員会が保管している。

## 凡　　例

1. 本書の土色は、新版標準土色帖（農林水産省水産技術会議事務局2001年版）に準拠している。
2. 地図中の座標値は、世界測地系座標を使用した。また調査にあたっては遺跡の西端にあたる地点（X:-192970 Y:13840）を測量基準点として、5×5mのグリッドを設定した。
3. 本文図版等で使用した方位はすべて真北を基準としている
4. 標高値は海拔高度を示す。
5. 遺構図の縮尺については、各図のスケールを参照されたい。
6. 遺構の略号は次のとおりである。  
SA：柱列跡　　SB：掘立柱建物跡　　SD：溝跡　　SK：土坑　　SL：土塁  
SM：小溝状遺構　P：ピット・柱穴　　K：カクラン（土層断面図に使用）
7. 遺物の略号は次のとおりである。  
B：弥生土器　　C：土師器（ロクロ不使用）　D：土師器（ロクロ使用）　E：須恵器  
G：土師質土器　I：陶器　　J：縦器　　Ke：石製品　P：土製品
8. 遺物実測図・遺物写真は原則として縮尺1/3で表示し、異なる場合は各図に表記した。
9. 土師器実測図における網掛けは、黒色処理が施されていることを示している。その他の付着物や痕跡等は図上に表記している。
10. 遺構土層註記表中に<　>が付いた数字は横出長を示す。また遺物観察表中の法量で（　）が付いた数字は、図上で復元した推定値である。
11. 報告書同封のCD-ROMに、別添図として遺跡全体の平面測量図と調査区遺構配置図、写真図版を収録している。本文と併せて参照されたい。

# 本文目次

卷頭カラー写真

序文

例言・凡例

## 第1章 調査概要

第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査要項	2
第3節 道路の位置と環境	3
1. 地理的環境	3
2. 歴史的環境	3
第4節 試掘・確認調査	9
1. 調査概要	9
2. 基本層序	9
3. 検出遺構と出土遺物	9・10
(1) A-1区	10
(2) A-2区	10
(3) A-4区	10
(4) B-2区	11
(5) B-4区	12
(6) B-6区	15
(7) B-7区	15
(8) B-8区	15
(9) B-11区	16
(10) B-14区	16
(11) B-15区	16

## 第2章 平成26年度発掘調査（第1次調査）

第1節 調査概要	24
1. 調査経過	24
2. 基本層序	24
第2節 検出遺構と出土遺物	28
(1) 土堤・堀跡	26
(2) 溝跡	35
(3) 土坑	46
(4) 柱列跡・ピット	52
(5) 小溝状遺構群	56
(6) 調査区一括出土遺物	61

## 第3章 総括

第1節 検出遺構と出土遺物	65
第2節 まとめ	69

## 図 版 目 次

第1図 和田織部館跡位置図	1
第2図 事業地内道路分布図	2
第3図 周辺の道路図	6
第4図 各調査区配置図 (S=1/2000)	8
第5図 A-1・A-2・A-4・B-2区遺構配置図・土層断面図	13・14
第6図 B-4・B-6・B-7・B-8区遺構配置図・土層断面図	17・18
第7図 B-11・B-14・B-15区遺構配置図・土層断面図	19・20
第8図 試掘・確認調査区出土遺物	21
第9図 調査区壁土層断面図	25・26
第10図 和田織部館跡遺構配置図1 (S=1/200)	29・30
第11図 和田織部館跡遺構配置図2 (S=1/200)	31・32
第12図 SL1土堀・SD2塗跡土層断面図	33
第13図 SL1土堀出土遺物	34
第14図 SD2塗跡出土遺物(1)	36
第15図 SD2塗跡出土遺物(2)	37
第16図 溝跡 平面図1 (S=1/100)	39・40
第17図 溝跡 平面図2 (S=1/100)	41・42
第18図 溝跡断面図(1)	43
第19図 溝跡断面図(2)・出土遺物(1)	44
第20図 溝跡出土遺物(2)	45
第21図 土坑 平・断面図(1)	48
第22図 土坑 平・断面図(2)	49
第23図 土坑 平・断面図(3)	50
第24図 土坑 平・断面図(4)・出土遺物	51
第25図 ピット配置図 (S=1/200)	53
第26図 小溝状遺構群配置図 (S=1/200)	57
第27図 小溝状遺構群配置図 (S=1/400)	62
第28図 SMI120・調査区一括出土遺物(1)	63
第29図 調査区一括出土遺物(2)	64
第30図 各時期の遺構変遷図1 (S=1/400)	66
第31図 各時期の遺構変遷図2 (S=1/400)	67
第32図 検出遺構変遷模式図	67
第33図 各時期出土遺物	68
第34図 蕎生在所概要図	70

## 表 目 次

第 1 表 道跡地名表	7
第 2 表 土坑土層註記表(單層)	52
第3-1表 ピット土層註記表(1)	54
第3-2表 ピット土層註記表(2)	55
第 4 表 小溝状遺構A群土層註記表	56
第5-1表 小溝状遺構B群土層註記表(1)	56
第5-2表 小溝状遺構B群土層註記表(2)	58
第 6 表 小溝状遺構C群土層註記表	58
第 7 表 小溝状遺構D群土層註記表	58
第8-1表 小溝状遺構E群土層註記表(1)	59
第8-2表 小溝状遺構E群土層註記表(2)	60
第 9 表 小溝状遺構F群土層註記表	60
第 10 表 小溝状遺構G群土層註記表	61
第 11 表 小溝状遺構H群土層註記表	61
第 12 表 試掘・確認調査遺物集計表	72
第 13 表 本発掘調査遺物集計表	72

## 写真図版目次

写真図版1 試掘・確認調査(1)	22
写真図版2 試掘・確認調査(2) 各調査区出土遺物	23
写真図版3 調査地点周辺航空写真	73
写真図版4 SL1土堀検出状況	74
写真図版5 調査区壁断面	75
写真図版6 土堀北・西側地区・SL1土堀土層断面	76
写真図版7 溝跡土層断面(1)	77
写真図版8 溝跡土層断面(2)・ピット・ 土坑土層断面(1)・遺物出土状況	78
写真図版9 土坑土層断面(2)・検出状況(1)	79
写真図版10 土坑土層断面(3)・検出状況(2)・ 調査区内作業状況	80
写真図版11 調査区内出土遺物(1)	81
写真図版12 調査区内出土遺物(2)	82

# 第1章 調査概要

## 第1節 調査に至る経緯

蒲生北部地区は、仙台駅から東方約10km、七北田川左岸の仙台港南側に位置する。平成23年3月11日の東日本大震災で甚大な被害を受けた地区である。本地区については、発生頻度が比較的高いとされる数十年から百数十年に一度程度の津波に対しては宮城県施行の七北田川堤防及び海岸堤防による対策で効果があると考えられているが、今回と同程度の津波に対しては被害の危険性が高いと想定されることから、仙台市では本地区を災害危険区域に指定し、住宅については防災集団移転促進事業を進めている。したがって防災集団移転後は土地の整理集約及び土地利用の効率化を行い、業務系土地利用を前提とした新たな産業集積の促進及び早急な都市基盤の再整備を図ることを目指し、蒲生北部被災市街地復興土地区画整理事業が計画された。

その一環である道路計画においては、地区西側の高砂駅蒲生線の延伸部として、地区中央を東西に横断し、臨港道路へ抜ける幅員21mの都市計画道路が策定された。この都市計画道路及びそれを補完する主要道路は、一部が和田織部館跡、牛小舎遺跡、貞山堀などの周知の埋蔵文化財包蔵地の範囲内であることから、仙台市教育委員会では事業主体者と協議を重ね、申請者より提出された「蒲生北部地区被災市街地土地区画整理事業計画と埋蔵文化財のかかわりについて（協議）」（平成25年9月25日付教生文第253-18号で伝達）に基づく試掘・確認調査を平成25年度に行い、その結果により本発掘調査を平成26年度に実施することとなった。



第1図 和田織部館跡位置図



第2図 事業地内遺跡分布図

平成25年度の試掘・確認調査は土地区画整理事業計画に伴い新設される道路部分を対象に行った。当初事業地内に遺跡隣接地内を含めて20箇所の調査区を設定していたが、事前の現地踏査の結果、現在の土地利用の制約などから調査地点の移動も含めて検討を行い、9箇所で確認調査を行うこととし、平成25年11月11日から調査に着手した。その結果検出された遺構は和田織部館跡もしくはそれに伴う屋敷地に関連するものと推定された。その後、新たに2箇所の調査区を設定し平成25年12月2日から追加の確認調査を実施し、さらに和田織部館跡に関連する堀跡や土塁の構築土等が検出された。

これらの調査成果から、和田織部館跡とその周辺には、遺構が広く分布していることが明らかとなった。特に和田織部館跡の西辺と北辺の一部で残存している土壘状の高まりは、いずれも地表顕在遺構として確認することができ、また溝跡の中には屈曲部が確認され区画施設としての性格を想定させるものもあった。

これらの結果を受けて事業主体者と協議を行い、和田織部館跡に関わる北西部土塁・堀跡、及びそれに伴う区画施設等の検出、精査を主な目的として、和田織部館跡北西部の本発掘調査を平成26年7月28日から開始した。

## 第2節 調査要項

遺跡名称	和田織部館跡
所在地	宮城県仙台市宮城野区蒲生
調査主体	仙台市教育委員会（生涯学習部文化財課）
調査担当	調査調整係 係長 斎野裕彦、主査 平間亮輔、主事 小泉博明 黒田智章 文化財教諭 佐藤高陽 坂坂純一 千葉靖彦
調査面積	試掘・確認調査 545.77m <sup>2</sup> (A-1区: 19.20m <sup>2</sup> A-2区: 84.15m <sup>2</sup> A-4区: 99.64m <sup>2</sup> B-2区: 48.15m <sup>2</sup> B-4区: 51.51m <sup>2</sup> B-6区: 43.40m <sup>2</sup> B-7区: 34.90m <sup>2</sup> B-8区: 54.06m <sup>2</sup> B-11区: 26.52m <sup>2</sup> B-14区: 30.68m <sup>2</sup> B-15区: 53.56m <sup>2</sup> )

調査期間	平成25年11月11日～12月9日
検出遺構	土塁1条、溝跡（小溝状遺構を含む）21条、土坑27基、ピット44基
出土遺物	総数57点（土師器、須恵器、陶磁器、石製品、土製品、金属製品…テンバコ1箱分）
調査年度	平成26年度（本発掘調査）
調査担当	整備活用係 主幹兼係長 長島栄一、主任 斎藤克巳、主事 及川謙作、 文化財教諭 石山智之 伊藤翔太 橋本勇人、専門員 木村浩二
調査面積	1227m <sup>2</sup>
調査期間	平成26年7月28日～11月7日
検出遺構	土塁1条、堀跡1条、溝跡18条、小溝状遺構99条、土坑23基、ピット101基
出土遺物	総数171点（弥生土器、土師器、須恵器、土師質土器、陶磁器、石製品、土製品…テンバコ3箱分）

### 第3節 遺跡の位置と環境

#### 1. 地理的環境

和田織部館跡は仙台市北東端、仙台港フェリー埠頭から南西に約1.8km、七北田川左岸の自然堤防及び第Ⅰ浜堤列上に位置し、標高は約1～2mである。

和田織部館跡がある蒲生地区及びその周辺一帯は、他の仙台平野沿岸部と同様に、海平面の上下動により出現した浜堤列が形成されている。最も内陸にある第Ⅰ浜堤列は約5000年前に形成されたとみられている。集落や畠地はこの浜堤列上にあることが多く、和田織部館跡やその北東約2kmに位置する沼向遺跡も第Ⅰ浜堤列とその周辺にある。

仙台平野の東部に分布する沖積平野は、多賀城市から山元町に至る南北約50km、東西10～20kmの広がりをもつ。仙台平野は七北田川、名取川、阿武隈川などの河川の作用で形成され、地表には自然堤防、後背湿地、浜堤列、旧流路などのわずかな起伏をもつ特徴的な微地形が分布している。地盤高は大部分が5m以下であるため、平成23年3月11日の東日本大震災に伴う津波により、仙台平野東部は広範囲に渡って多大な被害を被った。海岸線から約2km内陸の和田織部館跡周辺も甚大な被害を受けた。

仙台平野の北部を流れる七北田川は、時代によって流路を変えていたとみられている。近世以前の七北田川本流は、岩切地域から東流して現在の七ヶ浜町漆浜付近が河口であった。寛文4年（1664）3月頃、和田房長が七北田川の付け替えの普請を命じられ、同13年3月には普請を終している。それにより現在の七北田川の流路となっている。すなわち現在和田織部館跡のすぐ南側を流れる七北田川本流は、近世初頭まで七ヶ浜付近の南方を流れていったこととなる。

#### 2. 歴史的環境

##### （1）縄文時代

仙台平野の北東側に位置する七ヶ浜から松島湾にかけては大木圓貝塚など多くの遺跡が分布しており、縄文時代を通じて安定的な生活の痕跡が認められ、晩期中葉からは製塙も行われている。

蒲生地区のある七北田川下流域をみると、自然堤防に立地する山王遺跡では中期以降、浜堤列に立地する沼向遺跡では後期中葉以降の遺物が出土している。また沼向遺跡では遺構に伴って製塙土器が出土しており、海岸付近における生活の一端がうかがえる。七北田川下流域では当時は広大な潟湖が一面に広がり、居住地域は限られていた

とみられている。

#### (2) 弥生時代

弥生時代が始まる頃、高砂地域の海岸部では第Ⅱ浜堤列が形成され海岸線は徐々に沖合に後退していったようである。

七北田川流域において、自然堤防に立地する山王遺跡では弥生時代と推定される水田跡が検出され、後背湿地に位置する市川橋遺跡では石庭丁が出土している。また沼向遺跡では中期前葉の製塙土器が包含層から出土している。

#### (3) 古墳時代

七北田川下流域では、古墳時代前期後半に方墳、円墳、方形周溝墓が出現し集落が形成される。沼向遺跡では居住城と墓域が確認されている。墓域からは方墳3基、円墳10基、方形周溝墓7基が検出されており、そのうちの5号墳（方形周溝墓）からはガラス小玉が4点出土している。また山王遺跡では複数の地点で水田跡が検出されており、広域的な水田経営がなされていたと考えられている。

中期になると古墳の築造は一時的に行われなくなる。七北川下流域では、丘陵に近く扇状地性の地形面の自然堤防に立地する鴻ノ巣遺跡で拠点的な集落が形成されるが、地域全体の遺跡数は減少する。沼向遺跡からは居住城や墓域はみられなくなり、遺構遺物の検出が極めて少なくなる時期となる。

しかし、古墳時代後期中葉になると七北田川下流域では遺跡数が増加し、拠点的な集落のあり方に変化が見られる。沼向遺跡もこうした新たに形成された集落と位置付けられる。浜堤列上には柱を立てて区画された畠城が、後背湿地には水田城が作られるようになり、集落は居住城と生産城によって構成されていた。市川橋遺跡でも居住城の形成がみられる。それに伴い、横穴式石室をもつ川袋1号墳（円墳）、郷楽4号墳（円墳）などの古墳や、大代横穴、道安寺横穴などの横穴墓が造営されるようになる。

#### (4) 奈良・平安時代

奈良時代になると、七北川流域では沼向遺跡の北北西3.5kmの丘陵に多賀城が造営され、陸奥国の国府として機能していた。また周辺に付属寺院等も建設された。多賀城跡の南側に位置する山王遺跡、市川橋遺跡では遺構数の増加がみられる。貞觀11年（869）の地震では、多賀城下を津波が襲い多数の溺死者を出した様子が『日本三代実録』に記されている。この津波の痕跡と考えられる堆積物が、沼向遺跡から見つかっている。

この頃沼向遺跡では人の活動を示す痕跡がいったん途絶えるが、潟湖西岸に位置する中野高柳遺跡で10世紀には生産城（畠城・水田城）が形成されるようになり、12世紀には居住城も営まれるようになる。

#### (5) 中世～近世

現在の蒲生・中野から多賀城市の八幡にかけての地域には八幡荘やわたのじょうとよばれる荘園があったことが知られている。八幡荘は12世紀頃までには成立していたと考えられており、奥州藤原氏の滅亡後、在庁官人であった平陸奥介景衡が鎌倉幕府に八幡荘の地頭職を安堵されている。

室町時代には八幡荘は保田景家の領地となる。保田氏は後に八幡介を名乗り、観応の擾乱とともにあって続く混乱の中で、留守氏との関係を深めていったようである。高砂地域が含まれていた八幡荘は留守氏の強い影響力のもと戦国時代を迎える。やがて南方から伊達氏が勢力を広げる中、高砂地域一帯における八幡介氏の影響力は薄れていき、代わって留守氏が支配を強めていった。

和田織部館跡の北西約2kmに位置する中野高柳遺跡では、八幡荘の中でも有力な武士の屋敷群が形成されていたと考えられている。階層性のある建物の配置や区画施設がみられ、また小規模な建物が明確に場所を区分して配されていたことから、屋敷主の建物や家臣・従者の住まいであったと推測される。遺物は在地産の陶器や常滑産の陶器、手づくねかわらけに加え鉄地銅象嵌飾等が出土している。

和田織部館跡から北東約3kmの多賀城市八幡に所在する八幡沖遺跡は、「風土記御用書出」によると建保年間（1213～1219）に平右馬助が古館（現在の八幡館跡）に居城を定めたため、もともとその場所にあった神社を八幡沖遺跡のある宮内に移したことから、それが現在の八幡神社になったと推定されている。2014年の調査で八幡神社東側において、中世から近世にかけて神社を区画していたと考えられる溝跡が周囲を巡るように検出されている。特に東側の溝跡に関しては全長72mにわたって検出されており、さらに神社の南側では18世紀初頭以降の建物跡が検出されている。遺物は、さし銭や舟形・漆器椀といった木製品、銅椀、17世紀末頃の陶器（すり鉢）のほか、10～12世紀頃の土師質土器の破片などが多量に出土している。

近世に入り仙台藩が成立すると領内各所の要地に重臣が配置された。その拠点は政治的重要性やその規模などから「城」、「要害」、「所」、「在所」として区分され、他に在郷屋敷があった。この制度に基づき、宮城郡陸方蒲生村を和田氏が「在所」として拝領する。家中集落とその付近を通称「和田新田」と称し、字屋敷・字西屋敷添・字東屋敷添の地名が今も残っている（第34図）。

和田氏は仙台藩では着座の家格を有する家柄である。もともと大和国高取城主松倉氏の一族で和田為頼が伏見で伊達政宗に1200石で召し抱えられ小姓頭を勤めたのが始まりである。為頼は伊達忠宗によって出入司に任じられ、北上川の改修等を行い、1500石を次代の房長に残した。房長は寛文4年（1664）3月頃、佐々木伊兵衛とともに七北田川の付け替えと船曳堀、船入堀の普請を命じられ、同13年3月には房長が折願成就の石灯籠を塩竈神社に寄進し、普請終了を祝っている。この間、宮城郡留ヶ谷村紅葉谷（多賀城市留ヶ谷）に本拠を移し、延宝元年（1673）には前述したように蒲生村に32石余の知行地を「在所」として拝領し、家中集落の普請を行った。

家中集落の縦張りの様子は、明治19年（1886）の地籍図などから推測できる。家中集落は正面の西半分の堀と正面の堀、南面の土塁と用水によって周囲から区画されていた。集落内部には「西小路」「北小路」「中小路」「南小路」「東小路」の道路が走っており、集落の主要道は当主屋敷の門前である「西小路」である。西小路の北端には集落全体の出入り口があり、通路が屈折した形で残っている。各通りには家中屋敷が立ち並び、和田氏居屋敷に近いほど家中での地位が高いという。これらの家中屋敷のうち集落の北端の屋敷地を「北の家」、南端を「南家」、東端を「東家」と言った。集落の中心は和田氏の居屋敷で、屋敷には四方に堀が廻り、特に西側の堀は集落全体を囲む堀と近接し、二重堀として堅固な守りとなっていた。

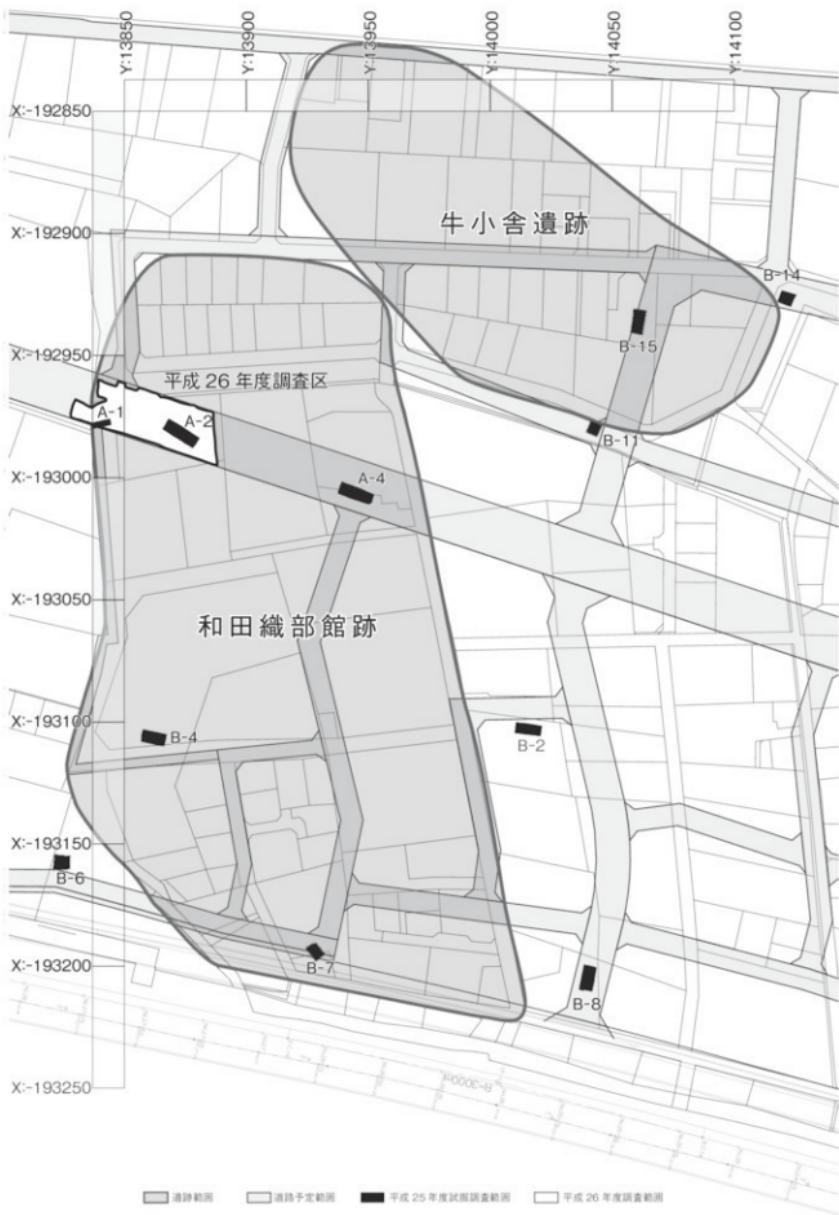
『正保郷帳』『文政風土略記』などの史料から、蒲生村の新田開発は正保年間以前に和田氏等の藩士により活発に行われたことが分かる。今回の調査対象地一帯が「和田新田」と呼ばれる所以である。

第3図 周辺の道路図



第1表 遺跡地名表

%	遺跡名	種別	立地	時代
1	利川鍋子山遺跡	居敷	渕原	近世
2	小介今瀬跡	散布地	自然環境	奈良・平安
3	西草道跡	散布地	自然環境	奈良・平安
4	真山城	河原	河原	近世
5	小野高森遺跡	集落跡	自然環境	平安・中・近世
6	竹ノ内遺跡	集落跡・寺跡	河原	近世
7	耳取原社堂板碑	板碑	自然環境	中世
8	酒向遺跡	古墳・集落・水田跡	洪原・後背湿地	弥生・古墳・平安
9	回母仁曾敷跡	居敷	自然環境	古墳
10	阿闍利神社板碑群	板碑	自然環境	中世
11	拂室吉古神社板碑群	板碑	自然環境	中世
12	地藏浦遺跡	散布地	自然環境	中世
13	六丁の山北町板碑	板碑	自然環境	中世
14	小原遺跡	散布地	自然環境	平安
15	鶴巣遺跡	散布地	自然環境	平安
16	回子遺跡	散布地	自然環境	平安
17	鶴巣・喜連遺跡	散布地	自然環境	平安
18	鶴巣佐原神社板碑群	板碑	自然環境	中世
19	旭町山遺跡	散布地	自然環境	平安
20	八ノ浦・曉神社板碑	板碑	自然環境	中世
21	小野吉曾敷跡	板碑	自然環境	中世
22	花房遺跡	散布地	自然環境	奈良・平安
23	花房・日ノ目板碑群	板碑	自然環境	中世
24	花房・丁ノ目板碑群	板碑	自然環境	中世
25	花房愛宕神社板碑群	板碑	自然環境	中世
26	豊源寺遺跡	板碑	自然環境	中世
27	西光寺遺跡	板碑	自然環境	讃岐
28	船室御所跡	板碑	自然環境	中世
29	御前院御所跡	板碑	自然環境	中世
30	四野御所・堂板碑群	板碑	自然環境	中世
31	平丁道跡	散布地	自然環境	平安
32	原下板碑群	板碑	自然環境	中世
33	上平南御所跡	板碑群	自然環境	中世
34	達子御所跡	集落	自然環境	播磨・中世
35	大日御所跡	集落・城郭	自然環境	金丸・平安・中世・近世
36	御ノ川也跡	板碑	自然環境	中世
37	御ノ川也跡	板碑	自然環境	中世
38	御前御所・堂板碑群	板碑	自然環境	中世
39	小野吉曾敷跡	板碑	自然環境	中世
40	紀伊風吹御所跡	城郭	石垣	中世
41	羽前里御所跡	板碑群	猿掛斜面	中世
42	弓削御所跡	石垣	自然環境	中世・近世
43	若宮御所跡	城郭・祭祀遺跡	城郭・土塁	古墳・文・唐・近世
44	大日御所跡	集落	自然環境	平安・中世
45	大日北御所跡	集落	自然環境	古代・近世
46	新田遺跡	集落・城郭	自然環境	紀文・古墳・中世
47	安寧寺遺跡	寺院	自然環境	古代・中・中世
48	内船御所跡	城郭	自然環境	中世
49	山ノ越子刈田地区	集落・部屋・居宅・瓦窯	自然環境	弥生・世
50	山上遺跡	集落・部屋・居宅・瓦窯	自然環境	弥生・世
51	六貫田御所跡	散布地	自然環境	古代
52	赤川御所跡	集落・部屋	自然環境	平安
53	特別史跡 多賀城跡	河原	石垣・自然環境	紀文・平安
54	金糸貝塚	貝塚	猿掛斜面	紀文・淨狩平・奈良・平安
55	五方丸山遺跡	墓	石垣	紀文・中・古墳・古墳・古墳・中・世
56	居間原横穴墓群	横穴墓	猿掛斜面	古墳
57	法性院御所跡	散布地	猿掛斜面	古代
58	西北御所跡	集落	石垣	古代
59	高見草遺跡	散布地	石垣	古代・中世
60	小原御所跡	散布地	石垣	古代・中世
61	野田遺跡	散布地・城郭	猿掛斜面	古代・中世
62	六作・船跡	散布地・城郭	石垣	古代・中世
63	前川遺跡	街市・城郭	石垣	古代・中世
64	今野家住宅	戸家	近世	
65	高崎古墳跡	円墳	石垣	古墳・中
66	多賀城跡	寺院	石垣	奈良・平安
67	高崎遺跡	集落・都市・城郭	石垣	奈良・平安・中世
68	御ノ谷御所跡	城郭	石垣	古代・中世
69	御星敷野跡	城郭	石垣	中世
70	祐舟古墳	円墳	石垣	古墳後
71	坂井船跡	城郭	石垣	中世
72	東田中曾前遺跡	散布地	石垣	古代・中世
73	志引道跡	散布地・城郭	石垣	紀文・奈朝・古代・中世
74	六郷船跡	散布地	石垣	古代・中世
75	九幡淨御舟跡	集落	洪原	古代・近世
76	東見渡遺跡	散布地	洪原	古代
77	板木敷野跡	城郭	淨御平野	不明
78	西堀遺跡	散布地	自然環境	古代
79	元氣湯遺跡	散布地	自然環境	古代
80	大代養跡	散布地	石垣	紀文・古代
81	大代御所跡	御所跡・庭園	自然環境	中世
82	大代御所・御番屋	櫛穴墓	猿掛斜面	古墳後
83	御本園横穴墓群	横穴墓	猿掛斜面	古墳後
84	大代日ノ目・櫛穴墓群	横穴墓	猿掛斜面	古墳時代・古代
85	前川遺跡	散居地	猿掛斜面	古代
86	例月日ノ目	日出地	猿掛斜面	紀文・奈朝・古代
87	貞の原	河原	河原	近世
88	例月櫛穴墓群	横穴墓	猿掛斜面	古墳後
89	砂原櫛穴墓群	横穴墓	猿掛斜面	古墳
90	垂木櫛穴墓群	横穴墓	猿掛斜面	古墳後
91	牛人道跡	散居地	海岸	古代
92	牛人日進跡	散居地	海岸	古代
93	牛人C進跡	散居地	海岸	古代
94	前川日塙	日塙	猿掛斜面	紀文・奈朝
95	加瀬社日進跡	散居地	猿掛斜面	紀文・奈朝
96	鶴の山山麓櫛穴墓群	横穴墓	猿掛斜面	古墳
97	阿須原日塙	日塙	猿掛斜面	紀文・奈朝
98	日向日塙	日塙	猿掛斜面	紀文・奈朝
99	野川遺跡	散居地	猿掛斜面	紀文・奈朝
100	鬼山・牛山(野山田駒)	日出地・蟹塙	猿掛斜面	紀文・奈朝・奈良
101	長兵日進跡	日塙・蟹塙	猿掛斜面	紀文・奈朝
102	東洋遺跡	散居地	海岸	古墳
103	下原日進跡	散居地	猿掛斜面	古墳
104	日ノ目進跡	散居地	猿掛斜面	不明
105	大川城跡	城郭	猿掛斜面	中世
106	大日日塙	日塙	猿掛斜面	紀文・後
107	左近道跡	散居地	猿掛斜面	古代
108	小日塙	日塙	猿掛斜面	紀文・奈朝
109	左近日塙	日塙	猿掛斜面	紀文・奈朝
110	日出日塙	日塙	猿掛斜面	紀文・奈朝
111	小原遺跡	散居地	猿掛斜面	紀文・奈朝
112	木原日塙	日塙	猿掛斜面	紀文・奈朝
113	木原遺跡	散居地・蟹塙	猿掛斜面	平安
114	木原日塙	日塙	猿掛斜面	古墳
115	木原日塙	日塙	猿掛斜面	紀文・奈朝
116	木原日塙	日塙・蟹塙	猿掛斜面	平安
117	木原日塙(空堀日塙)	日塙	猿掛斜面	紀文・奈朝
118	吉田日塙	日塙	猿掛斜面	紀文・奈朝
119	吉田日塙	日塙	猿掛斜面	紀文・奈朝
120	元ノ日塙	日塙	猿掛斜面	紀文・奈朝
121	日目日塙	日塙	猿掛斜面	平安
122	神代遺跡	散居地	海岸	古代
123	沢日日塙	日塙	海岸	紀文・奈朝・平安
124	日目日塙(空堀日塙)	日塙	猿掛斜面	紀文・奈朝
125	吉田神社遺跡	散居地	海岸	古墳後
126	吉田前田日塙	日塙	猿掛斜面	紀文・奈朝
127	吉田城跡	城郭	猿掛斜面	中世
128	垂木遺跡	日塙	猿掛斜面	紀文・奈朝
129	弓日日塙	日塙	猿掛斜面	中世
130	丸山遺跡	城郭	猿掛斜面	平安・中世
131	參拜社遺跡	散居地	猿掛斜面	古代
132	丸山日塙	日塙	猿掛斜面	平安
133	高木櫛穴墓群	横穴墓	猿掛斜面	古墳後
134	新原日塙	日塙・蟹塙	猿掛斜面	古墳
135	一本松日塙	日塙・蟹塙	猿掛斜面	古墳後
136	一本松櫛穴墓群	横穴墓	猿掛斜面	古墳時代
137	毘古古跡	散居地	猿掛斜面	中世
138	毘古社日進遺跡	散居地・製塩場	猿掛斜面	紀文・中
139	猪手川遺跡	散居地	猿掛斜面	平安
140	弓ノ日進跡	散居地	猿掛斜面	平安
141	櫛穴櫛穴墓群	横穴墓	猿掛斜面	奈良?
142	十二本櫛穴	塙	猿掛斜面	中世
143	十三弓塙	散居地	猿掛斜面	古墳後
144	御ノ弓塙	散居地	猿掛斜面	古墳・後
145	津御跡	散居地	猿掛斜面	古代
146	八弓遺跡	散居地	猿掛斜面	古代
147	北之遺跡	散居地	猿掛斜面	古代
148	加加御所跡	散居地	猿掛斜面	自然環境・紀文・古代
149	伊豆(北之)神社	神社	猿掛斜面	平安
150	寄原弓塙	散居地	猿掛斜面	古墳・古墳後
151	西人神塙	散居地	猿掛斜面	古墳
152	阪ノ弓塙	門塙	猿掛斜面	古墳
153	御ノ弓塙跡	城郭	猿掛斜面	中世
154	御前前遺跡	宗教遺跡	猿掛斜面	中世
155	弓箭城跡	城郭	猿掛斜面	中世
156	北之櫛穴墓群	横穴墓	猿掛斜面	古墳
157	弓箭日塙	城郭	猿掛斜面	平安・中世
158	宇治川遺跡	散居地	猿掛斜面	古墳
159	弓之遺跡	散居地	猿掛斜面	古墳
160	元氣湯櫛穴庵	猿掛斜面	古墳	
161	馬場馬日塙	櫛穴墓	猿掛斜面	古代
162	赤来御所跡	櫛穴墓	猿掛斜面	古墳後
163	吉田御所跡	櫛穴墓	猿掛斜面	古墳
164	御前御所跡	櫛穴墓	猿掛斜面	古墳・中世
165	御本園櫛穴墓群	横穴墓	猿掛斜面	古墳
166	御馬場日塙	日塙	猿掛斜面	古墳・中世



第4図 各調査区配置図 (S=1/2000)

## 第4節 試掘・確認調査

### 1. 調査概要

平成25年度の試掘・確認調査は、土地区画整理事業計画に伴い、新設される道路部分を対象として行った（第4図）。当初、事業地内に遺跡隣接地内を含めて20箇所の調査区を設定していたが、土地利用の制約から、調査地点の移動も含めて検討を行い、9箇所について、確認調査を行うこととなった。調査は平成25年11月11日に着手し、和田織部館跡の北西部から開始し、A-2区などの調査区では、溝跡、土坑、ピットなどが検出された。一方、和田織部館跡の南西部に配置されたB-6区では盛土が厚く、遺構検出面に達することができなかった。地元住民の話では、盛土が行われている現況以前は、湿地帯であり、水田として利用されていたとのことであった。また、七北田川左岸堤防に隣接するB-7区では、遺構検出面は確認されたが、湧水が著しく遺構検出作業を行うことができなかつた。牛小舎遺跡については、3箇所の調査区を設定して実施したが、そのうち2箇所は既に大きく現地形が変更され、遺構は残存していないものと判断された。

9箇所の調査成果が明らかとなった平成25年11月25日に、現地で今回の調査成果について検討を行った。各調査区で検出された遺構は、和田織部館跡もしくはそれに伴う屋敷地に関連するものと推定されたが、出土遺物が少量に留まり、遺構の年代が明らかにできないことや、調査を実施した地点数が、当初設定した調査地点数のおよそ半分に留まることから、確認調査の成果が不充分と考えられた。これを受けて、新たに2箇所の調査区を設定し、平成25年12月2日から、追加の確認調査を実施した。その結果、A-1区では、和田織部館跡に関連する溝跡と土壙が検出され、B-2区では、溝跡や土坑などが検出された。今回の試掘・確認調査では、年代は不明ながらも、和田織部館跡とその周辺には、遺構が広く分布していることが明らかとなった。また、牛小舎遺跡の大部分は、昭和40年代の仙台新港整備に関連するとみられる造成工事などによって、広範囲で土地の変更が行われているものと推定された。調査区の埋め戻しは、調査の進捗に合わせて実施し、平成25年12月9日に調査器材の撤収を行い、調査を終了した。

### 2. 基本層序

試掘・確認調査地点は2遺跡11箇所で、基本層は概ね共通し、盛土下に大別3層、細別6層の基本層を確認した。なお、和田織部館跡B-6区、牛小舎遺跡B-14区とB-15区では、削平と盛土により、基本層が確認されなかった。また本調査区で確認した基本層とは細部が若干異なり、同一ではない。

I層：対象地全域に分布する現表土・耕作土および旧耕作土である。宅地として利用されていた調査地点では、宅地化に伴う盛土に覆われる。調査地点により様相が若干異なるが、砂を均質に含む黒褐色や暗褐色などシルトおよび粘土質シルトで、しまりがない。調査地点により、最大3層に細別される。

II層：A-4区で確認した旧表土とみられる黒褐色の粘土質シルトである。砂を均質に含み、層下部には基本層Ⅲ層を斑状もしくはブロック状に含む。

III層：浜堤を形成する黄褐色およびぶい黄褐色を呈するしまりのない砂で、対象地全域に分布する。2層に細別される。上層のa層は、基本層I層およびII層の影響から漸移的な変化が認められ、下層のb層は均質である。今回の試掘・確認調査では、基本層Ⅲb層上面で遺構検出作業を行っている。

### 3. 検出遺構と出土遺物

和田織部館跡と牛小舎遺跡およびその隣接地に設定した調査区の、遺構検出面が確認できた各調査区からは、土

壙、溝跡、土坑、ピットなどが検出されている。遺物は、大部分が基本層からの出土で、遺構堆積土中からの出土はほとんどなかった。以下に、各調査区の概要と検出遺構の概要について詳述する。なお、A-1、A-2、A-4[×]、B-2、B-4、B-6、B-7、B-8区は和田織部館跡内と隣接地に、B-11、B-14、B-15区は牛小舎跡内と隣接地にそれぞれ位置している。

(1) A-1区（第5図） 和田織部館跡の北西隅に位置し、平成26年度の本調査区と重複する。溝跡1条、土壙1条を検出した。遺物は近世の陶磁器および古銭（寛永通宝）などが、合計で6点出土した。

**SD1溝跡（本発掘調査SD2塹跡）** 調査区西端部で確認した南北方向の溝跡で、SL1土壙に接し、並行している。上部は浅い窪みとして残存し、地表顕在遺構として確認することができる。検出長は約200mで、さらに調査区外南北へ延びる。遺物は出土していない。

**SL1土壙** 遺跡の北西側に残る地表顕在遺構である。試掘調査の際に西側の一部の断ち割り、その断面を確認している。SD1溝跡（本発掘調査SD2塹跡）と接し、並行している。調査区内で約2.80mを確認した。残存する基底部の幅は約2.10mで、高さは0.70mほどである。構築土は、砂を均質に含む暗褐色などの粘土質シルトで、いずれもしまりは弱い。

(2) A-2区（第5図） 和田織部館跡の北西部に位置し、平成26年度の本発掘調査区と重複する。溝跡8条（小溝状遺構を含む）、土坑3基、ピット9基、性格不明遺構1基を検出した。基本層および遺構堆積土から、中世陶器の鉢、石製品（砥石）、須恵器の环の小破片等が3点出土しており、そのうちの2点を掲載した（第8図1・2、写真図版2-1・2）。

**SD1溝跡（本発掘調査SD114・115溝跡）** 調査区中央部で屈曲する東西～南北方向の溝跡である。SD2溝跡（本発掘調査SD26溝跡）等と重複し、いずれよりも古い。規模は上端幅約1.20mで、深さ約0.50mである。断面形はU字形を呈する。堆積土は3層に細別され、砂を均質に含む黒褐色や暗オリーブ褐色の粘土である。いずれも自然堆積土と考えられる。

**SD2溝跡（本発掘調査SD26溝跡）** 調査区西端部で屈曲する東西～南北方向の溝跡である。SD1溝跡（本発掘調査SD114・115溝跡）と重複し、SD1溝跡よりも新しい。規模は上端幅約1.20mで、深さ約0.55mである。断面形はU字形を呈する。堆積土は2層に細別され、砂を均質に含む黄灰色および明黄灰色の粘土である。

(3) A-4区（第5図） 和田織部館跡の中央部東寄りに位置する。溝跡5条、土坑6基、ピット7基を検出した。基本層中から近現代陶磁器および堤焼の人形の頭部等が合計で10点出土しており、そのうちの1点を掲載した（第8図3、写真図版2-3）。

**SD1溝跡** 調査区東部～西部で検出した東西方向の溝跡である。SD5溝跡、SK1土坑、SK5土坑と重複し、SD5溝跡、SK1土坑よりも古く、SK5土坑よりも新しい。検出長は約12.60mで、さらに調査区外へ延びる。規模は上端幅約1.10～1.80mで、深さ約0.60mである。断面形は逆台形を呈する。堆積土は7層に細別され、いずれも自然堆積土と考えられる。

**SD2～5溝跡** 調査区東部に分布する南北方向の溝跡である。SD3溝跡は、SK1土坑よりも古く、SK3土坑よりも新しい。SD4溝跡は、SK1土坑よりも古い。SD5溝跡は、SD1溝跡、SK4土坑よりも新しい。検出長は約0.50～7.20mで、さらに調査区外へ延びる。規模は上端幅約20～40cmである。堆積土は砂を均質に含み、基本層3層をブロック状に含む暗褐色の粘土質シルトである。配置や規模から、畑耕作に関わる小溝状遺構の可能性がある。

**SK1土坑** 調査区中央部で検出した土坑である。SD1溝跡、SD3溝跡、SD4溝跡、SK5土坑と重複し、いずれよりも

も新しい。平面形は不整円形を呈する。規模は長軸約4.20m、短軸約3.30mである。

**SK2土坑** 調査区北西部で検出した土坑である。他の遺構との重複はない。平面形は隅丸方形を呈するものと考えられる。規模は東西約1.30m、南北1.00m以上である。

**SK3土坑** 調査区北西部で検出した土坑である。SD3溝跡と重複し、これよりも古い。一部の検出であることから、平面形は不明である。規模は東西1.20m以上、南北0.50m以上である。

**SK4土坑** 調査区中央部で検出した土坑である。SD5溝跡と重複し、これよりも古い。平面形は方形を呈するものと考えられる。東西1.00m以上、南北約1.00mである。

**SK5土坑** 調査区中央部で検出した土坑である。SD1溝跡、SK1土坑と重複し、いずれよりも古い。平面形は不明である。規模は東西1.20m以上、南北0.50m以上である。

**SK6土坑** 調査区南東部で検出した土坑である。他の遺構との重複はない。平面形は円形を呈するものと考えられる。規模は東西1.20m以上、南北0.40m以上である。

**ピット** 調査区全域に分布し、7基を検出した。平面形は円形もしくは楕円形を基調とし、規模は長軸約30～70cm、短軸約20～45cmである。堆積土は砂を均質に含み、基本層Ⅲ層をブロック状に含む黒褐色および暗褐色の粘土質シルトである。P4とP6からは、直径約10～25cmで円形の柱痕跡が検出された。

(4) B-2区（第5図） 和田織部館跡の東側の隣接地に位置する。溝跡2条、土坑4基、ピット12基を検出した。SD1溝跡の堆積土から近世磁器および土師質土器が合計で2点出土している。

**SD1溝跡** 調査区東部～西部で検出した東西方向の溝跡である。SD2溝跡、SK3土坑、SK4土坑、P5と重複し、いずれよりも古い。検出長は約5.70mで、さらに調査区外東西へ延びる。規模は上端幅約0.90～1.10m、下端幅約0.70mである。出土遺物はいずれも小破片のため図示できなかったが、徳利の染付の破片と思われる近世磁器および土師質土器が1点ずつ出土している。これらの出土遺物から、時期は近世以降であると考えられる。

**SD2溝跡** 調査区西部で検出した南北方向の溝跡である。SD1溝跡、P7と重複し、いずれよりも新しい。検出長は、一部、途切れているが、約2.10mで、さらに調査区外南に延びる。規模は上端幅約30cm、下端幅約10cmで、深さ約10cmである。堆積土は単層で、砂と基本層Ⅲ層を含む黒褐色の粘土質シルトである。遺物は出土していない。SD1溝跡よりも新しいことから、時期は近世以降であると考えられる。

**SK1土坑** 調査区北東部で検出した土坑である。P3と重複し、これよりも古い。一部の検出であることから、平面形は不明である。規模は東西50cm、南北30cm以上で、深さは約40cmである。断面形は不明であるが、土坑西壁は比較的急に立ち上がるものと考えられる。堆積土は2層に細別され、砂を均質に含む黒褐色と暗褐色の粘土質シルトである。

**SK2土坑** 調査区東部で検出した土坑である。他の遺構との重複はない。平面形は不整楕円形を呈する。規模は長軸約0.85m、短軸約0.55mで、深さは25cm以上である。断面形は逆台形を呈する。堆積土は2層に細別され、砂を均質に含み、基本層Ⅲ層をブロック状に含む黒褐色と暗褐色の粘土質シルトである。

**SK3土坑** 調査区中央部で検出した土坑である。SD1溝跡と重複し、これよりも新しい。平面形は隅丸長方形を呈する。規模は長軸約0.85m、短軸約0.70mで、深さは約25cmである。断面形は逆台形を呈する。堆積土は2層に細別され、砂を均質に含み、炭化物や基本層Ⅲ層を含む黒褐色と暗褐色の粘土質シルトである。

**SK4土坑** 調査区中央部で検出した土坑である。SD1溝跡と重複し、これよりも新しい。平面形は楕円形を呈する。規模は長軸約0.80m、短軸約0.60mである。SD1溝跡よりも新しいことから、時期は近世以降と考えられる。

**ピット** 調査区全域に分布し、合計で12基を検出した。P7はSD2溝跡よりも古い。P3がSK1土坑よりも、P5はSD1溝跡よりも、それぞれ新しい。平面形は円形もしくは楕円形を呈する。規模は長軸約0.20～0.60m、短軸約0.20

～0.30mで、深さ約15～25cmである。堆積土はいずれも単層で、砂を均質に含み、炭化物や基本層Ⅲ層を含む黒褐色や暗褐色のシルトや粘土質シルトである。柱痕跡が検出されたものはない。

(5) B-4区(第6図) 和田織部館跡の南西部に位置し、館跡の中心部とみられる範囲の南側に隣接する。溝跡2条、土坑9基、ピット9基を検出した。遺物は造構確認面およびSDI溝跡から17世紀前葉から18世紀代の陶器および磁器が3点出土している。今回はこのうちの2点を掲載した(第8図4・5、写真図版2-4・5)。

**SD1溝跡** 調査区西部で検出した南北方向の溝跡である。SK2土坑と重複し、これよりも新しい。検出長は約4.70mで、さらに調査区外へ南北に延びる。規模は上端幅約0.65～1.00m、下端幅約0.40mで、深さ約20～25cmである。断面形は逆台形を呈する。堆積土は2層に細別され、砂を均質に含み、炭化物や基本層Ⅲ層を含む黒褐色と暗褐色の粘土質シルトである。堆積土中から17世紀前葉の美濃焼の鉄軸大鉢の破片15(第8図5)が出土していることから、造構の時期は17世紀前葉以降と考えられる。

**SD2溝跡** 調査区北西部で検出した東西方向の溝跡である。他の造構との重複はない。検出長は約1.40mで、さらに調査区外へ延びる。規模は上端幅約25cmである。堆積土は砂を均質に含み、基本層Ⅲ層をブロック状に含む暗褐色の粘土質シルトである。

**SK1土坑** 調査区中央部で検出した土坑である。他の造構との重複はない。平面形は隅丸正方形を呈する。規模は東西約2.50m、南北約2.60mで、深さ約30cmである。断面形は逆台形を呈する。堆積土は単層で、砂を均質に含み、基本層Ⅲ層をブロック状に含む黒褐色の粘土である。

**SK2土坑** 調査区西部で検出した土坑である。SD1溝跡と重複し、これよりも古い。SD1溝跡に東側を壊されているが、平面形は隅丸正方形を呈するものと考えられる。規模は東西250m以上、南北約3.10mである。

**SK3土坑** 調査区西部で検出した土坑である。他の造構との重複はない。西側が調査区外になるが、平面形は隅丸方形を呈するものと考えられる。規模は東西0.90m以上、南北2.70m以上、深さ約50cmである。断面形は逆台形を呈する。堆積土は3層に細分されるが、いずれの層も砂を均質に含み、基本層Ⅲ層をブロック状に含む粘土質シルトである。

**SK4土坑** 調査区東部で検出した土坑である。SK5土坑と重複し、これよりも古い。東側が調査区になり、また北西側がSK5土坑に壊されているが、平面形は梢円形を呈するものと考えられる。規模は長軸1.50m以上、短軸1.10m以上で、深さ約40cmである。断面形は箱状を呈し、壁は底面から急に立ち上がる。堆積土は2層に細別され、砂を均質に含み、基本層Ⅲ層をブロック状に含む暗褐色の粘土質シルトである。

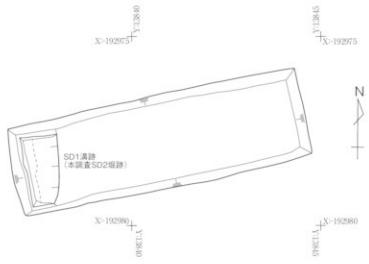
**SK5土坑** 調査区東部で検出した土坑である。SK4土坑と重複し、これよりも新しい。平面形は梢円形を呈する。規模は長軸約0.90m、短軸約0.60mで、深さ約40cmである。断面形はU字形を呈する。堆積土は2層に細別され、砂を均質に含み、基本層Ⅲ層をブロック状に含む黒褐色と暗褐色の粘土質シルトである。

**SK6土坑** 調査区南東部で検出した土坑である。SK7土坑、SK9土坑と重複し、SK7土坑よりも古く、SK9土坑よりも新しい。一部が調査区外に広がるが、平面形は梢円形を呈するものと考えられる。規模は長軸1.80m以上、短軸1.00m以上である。堆積土は単層で、砂を均質に含み、基本層Ⅲ層をブロック状に含む暗褐色の粘土質シルトである。

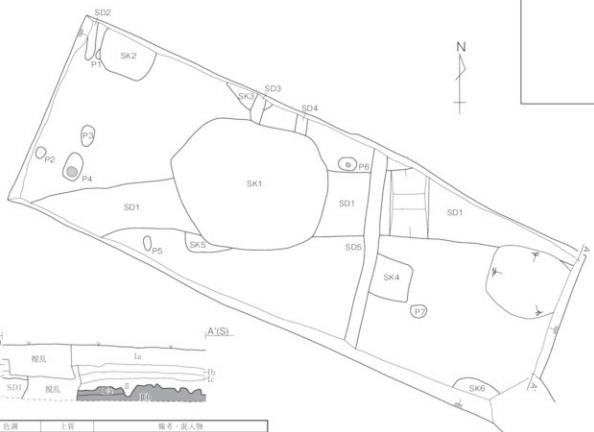
**SK7土坑** 調査区南東部で検出した土坑である。SK6土坑、P3と重複し、いずれよりも新しい。平面形は円形を呈する。規模は径0.90mほどである。

**SK8土坑** 調査区中央部で検出した土坑である。他の造構との重複はない。一部の検出であることから、平面形は不明である。規模は東西0.80m以上、南北0.20m以上である。

**SK9土坑** 調査区南東部で検出した土坑である。SK6土坑と重複し、これよりも古い。一部の検出であることから、

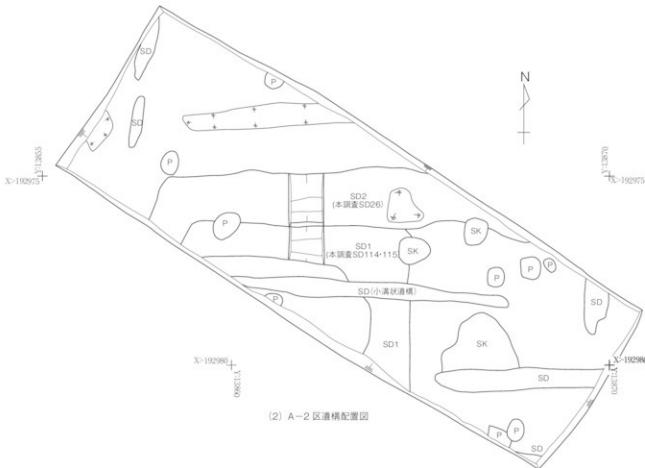


(1) A-1区遺構配置図

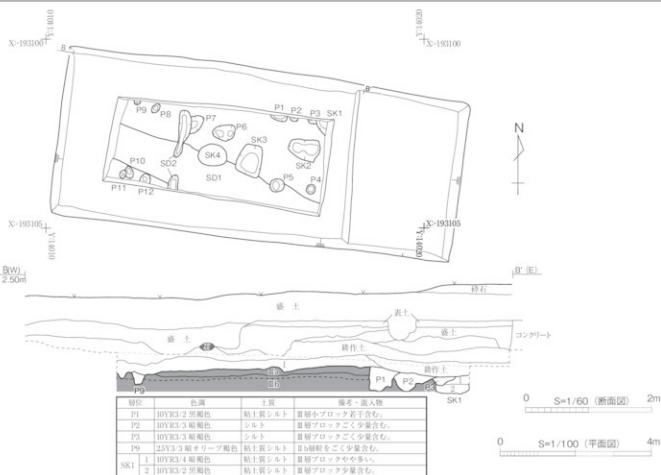


部位	色調	土質	備考・施入物
I a	H0YR3-1 褐褐色	シルト	均質に細砂を含む。現表土。ゴミを含む廃棄の層。
I b	H0YR3-2 褐褐色	シルト	均質に細砂を含む。瓦礫物を多量含む。ゴミを含む廃棄の層。
I c	H0YR3-3 褐褐色	シルト	均質に細砂をやや多く含む。炭化物粒を少量含む。
II a	23SY3-1 黄褐色	砂	砂層上の耕作層
II b	23SY3-2 黄褐色	砂	均質。
III a	23SY3-2 黄褐色	粘土質シルト	炭化物粒ごく少量。細砂を均質に含む。

(3) A-4区遺構配置図・東壁土層断面図



(2) A-2区遺構配置図



(4) B-2区遺構配置図・北壁土層断面図

第5図 A-1・A-2・A-4・B-2区遺構配置図・土層断面図

平面形は不明である。規模は東西0.50m以上、南北0.30m以上である。

**ピット** 調査区東半部で9基を検出した。P3がSK7土坑よりも古い。平面形は円形、梢円形、長方形を呈する。規模は長軸約0.25~0.70m、短軸約0.20~0.40mである。堆積土はいずれも単層で、砂を均質に含み、炭化物や基本層Ⅲ層を含む黒褐色や暗褐色の粘土質シルトである。柱痕跡が検出されたものはない。

(6) B-6区（第6図） 和田織部館跡の南西側の隣接地に位置し、北東に位置する和田織部館跡の中心部より1.50mほど高く、厚い盛土が確認される。調査区の周辺は、かつて湿地帯であり、水田として利用されていた地区である。現地表面から約2.00mの深度まで掘削を行ったが、盛土以前の水田耕作土、湿地堆積土、基本層である浜堤砂層のいずれも確認することはできなかった。遺物は出土していない。

(7) B-7区（第6図） 和田織部館跡の南部に位置する。遺構検出面まで掘削が達したもの、湧水が著しく、遺構検出作業を行うことができなかった。ただし、遺構検出面となる基本層Ⅲ層上面に堆積する基本層Ⅰ層から、近世の陶磁器、銭貨（寛永通宝）などを中心に32点の遺物が出土していることから、調査地点および周辺に近世の時期の遺構が分布している可能性がある。今回はそのうちの7点を掲載した（第8図6~12、写真図版2~6~12）。

(8) B-8区（第6図） 和田織部館跡の南東部にあたる隣接地に位置する。溝跡6条、土坑3基、ピット9基を検出した。遺物は出土していない。

**SD1溝跡** 調査区北部で検出した東西方向の溝跡である。SD2溝跡、SK2土坑、SK3土坑と重複し、いずれよりも古い。検出長は約4.00mで、さらに調査区外へ延びる。規模は上端幅約1.20mである。

**SD2溝跡** 調査区北部から南部で検出した南北方向の溝跡で、調査区南部で緩やかな弧状を呈する。検出長は約9.00mで、さらに調査区外南北へ延びる。規模は上端幅約0.90~2.00m、下端幅約0.60mで、深さ約40cmである。断面形は逆台形を呈する。堆積土は4層に細別され、砂を均質に含み、基本層Ⅲ層を粒状および小ブロック状に含む黒褐色と暗褐色の粘土質シルトである。

**SD3溝跡** 調査区中央部で検出した東西方向の溝跡である。SD2溝跡、SD4溝跡、SK1土坑と重複し、いずれよりも新しい。検出長は約5.20mで、さらに調査区外東西へ延びる。規模は上端幅約0.75~1.30m、下端幅約0.60mで、深さ約30cmである。断面形は逆台形を呈する。堆積土は3層に細別され、砂を均質に含み、基本層Ⅲ層を粒状および小ブロック状に含む黒褐色と暗褐色の粘土質シルトである。

**SD4溝跡** 調査区南部で検出した南北方向の溝跡である。SD3溝跡と重複し、これよりも古い。検出長は約0.90mで、さらに調査区外へ延びる。規模は上端幅約0.50mである。堆積土は単層で、砂を均質に含み、基本層Ⅲ層を粒状に含む黒褐色の粘土質シルトである。

**SD5溝跡** 調査区南東部で検出した東西方向の溝跡である。SD6溝跡と重複し、これよりも古い。検出長は約0.70mで、さらに調査区外東へ延びる。規模は上端幅約25cmである。堆積土は単層で、砂を均質に含み、基本層Ⅲ層を粒状に含む黒褐色の粘土質シルトである。

**SD6溝跡** 調査区南東部で検出した東西方向の溝跡である。SD5溝跡と重複し、これよりも新しい。検出長は約0.95mで、さらに調査区外へ延びる。規模は上端幅約15cmである。堆積土は単層で、砂を均質に含み、基本層Ⅲ層を粒状に含む暗褐色の粘土質シルトである。

**SK1土坑** 調査区南部で検出した土坑である。SD2溝跡、SD3溝跡と重複し、SD3溝跡より古く、SD2溝跡よりも新しい。一部の検出であることやSD3溝跡に壊されているが、平面形は長方形もしくは梢円形を呈するものと考えられる。規模は東西3.30m以上、南北1.20m以上で、深さ約30cmである。断面形は逆台形を呈する。堆積土は2層

に細別され、砂を均質に含み、基本層Ⅲ層を小ブロック状に含む暗褐色と黒褐色の粘土である。

**SK2土坑** 調査区北部で検出した土坑である。SD1溝跡、SD2溝跡と重複し、いずれよりも新しい。平面形は楕円形を呈する。規模は長軸約1.45m、短軸1.20mで、深さ約10cmである。断面形は皿状を呈する。堆積土は単層で、砂を均質に含み、基本層Ⅲ層をブロック状に含む黒褐色の粘土質シルトである。

**SK3土坑** 調査区北部で検出した土坑である。SD1溝跡と重複し、これよりも新しい。平面形は円形を呈する。規模は径約0.70mである。

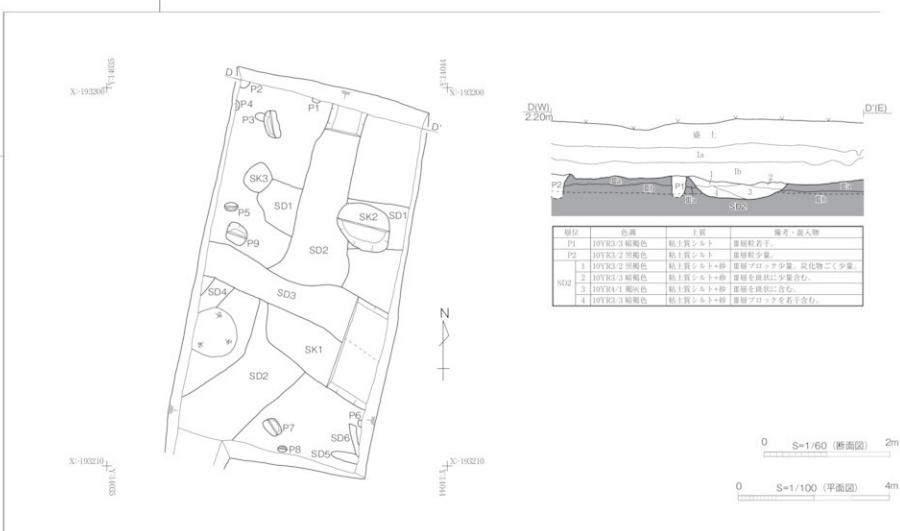
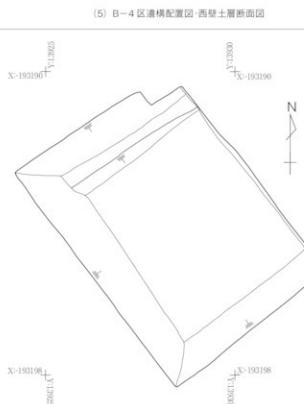
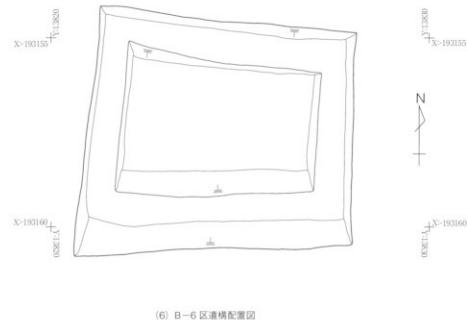
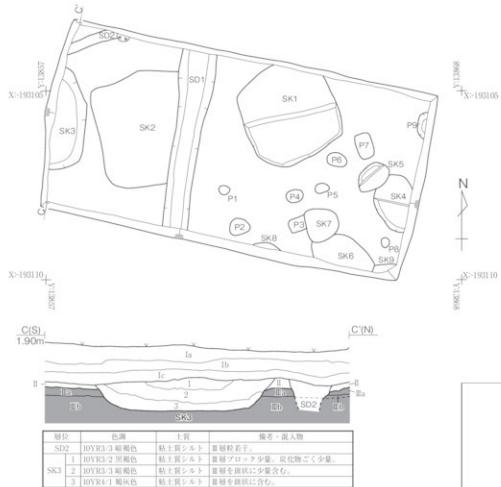
**ピット** 調査区全域に分布し、9基を検出した。平面形は円形、楕円形を呈する。規模は長軸約0.30～0.70m、短軸約0.15～0.50mで、深さ約10～20cmである。堆積土はほとんどが単層で、砂を均質に含み、炭化物や基本層Ⅲ層を含む黒褐色や暗褐色の粘土質シルトである。柱痕跡が検出されたものはない。

(9) B-11区（第7図） 牛小倉遺跡の南側にある隣接地に位置する。調査区は、和田織部館跡に関わる屋敷地の北側に隣接している。溝跡1条を検出した。遺物は出土していない。

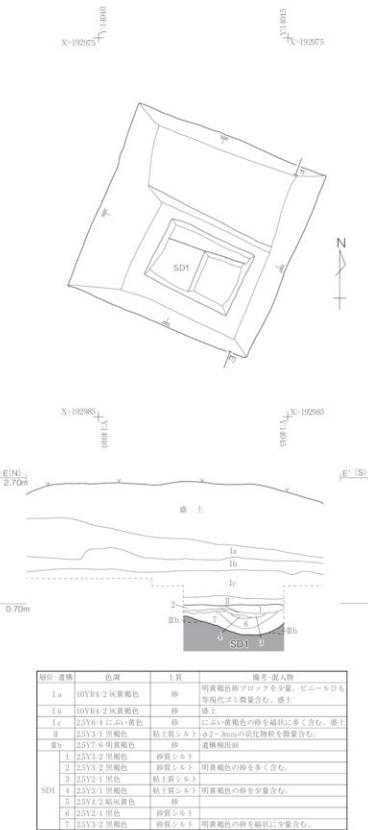
**SD1溝跡** 調査区南半部で検出した東西方向の溝跡である。検出長は約2.20mで、さらに調査区外に東西に延びる。規模は上端幅1.30m以上、下端幅約0.50mで、深さ約50cmである。断面形は逆台形を呈する。堆積土は7層に細別される。砂を均質に含み、植物遺存体を含む黒褐色などの砂質シルト、粘土質シルトなどで、いずれも自然堆積土である。

(10) B-14区（第7図） 牛小倉遺跡の東側の隣接地に位置する。現地表面から約2.30mの掘削を行ったが、砂を主体とした盛土層が厚く堆積し、遺構検出面を確認することができなかったことから、既に削平を受けているものと考えられる。これは後述するB-15区と類似している。遺物も出土していない。

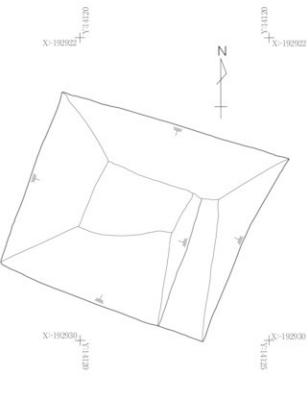
(11) B-15区（第7図） 牛小倉遺跡の東部に位置する。現地表面から約2.00mの掘削を行ったが、砂を主体とした盛土層が厚く堆積し、遺構検出面を確認することができなかったことから、既に削平を受けているものと考えられる。遺物も出土していない。



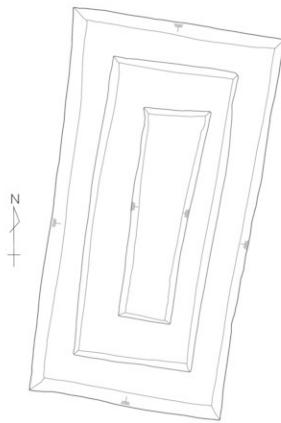
第6図 B-4・B-6・B-7・B-8区構構配図・土層断面図



(9) B-11 区構造配置図：東側土壁断面図



(10) B-14 区構造配置図

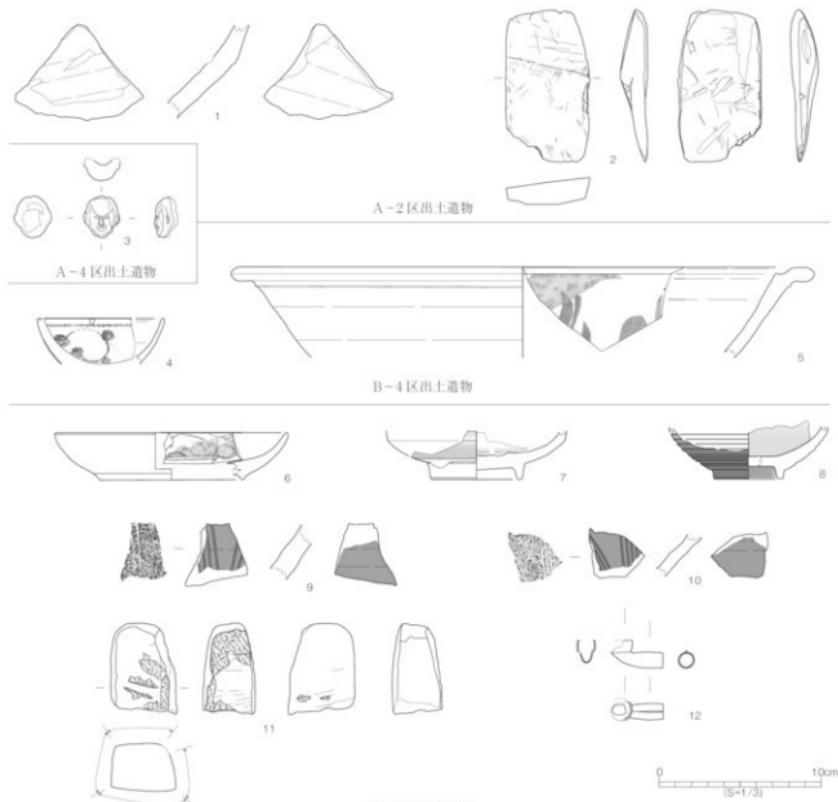


#### (11) B-15 区段構配図

S=1/100 (平面图) 4m

0 S=1/100 (平面図) 4m

第7図 B-11・B-14・B-15区遺構配置図・土層断面図



第8図 試掘・確認調査区出土遺物

単位はcm・g ( )の数値は復元値

No.	登錄番号	調査区	遺構名	層位	種別	器種・名称・部段	器高 長さ	口径 幅	底径 厚さ	重さ	備考・特記事項	年代・形式	写真 図版
8.1	I-1	A-2	調査区-1	Ⅱ層上面	陶器	鉢	—	—	—	64.6	ロクロ 内:ヘラク里 内:自然釉 剥り瓶	13c後期～ 14c前半	21
8.2	Ke-1		調査区-1	Ⅱ層上面	石製品	砾石	9.4	5.2	1.7	96.0	削り面(4面)		22
8.3	P-1	A-4	調査区-1	I～II	土製品	土入形・漆器	2.6	2.2	0.7～ 1.0	5.9	男爵面(4面) 他	18c～	23
8.4	J-1	B-4	調査区-1	Ⅱ層上面	磁器	染付草花文瓶	—	(8.0)	—	9.2	内:染付 肥前	17c中期	24
8.5	SD-12		SDI	陶器	鉢	大鉢	—	(36.0)	—	91.2	長石釉 内:緑釉底 美濃	17c前半	25
8.6	J-2	B-7	調査区-1	縫隙	磁器	染付瓶	—	(14.4)	(8.8)	21.5	見足部の縫隙ハリ 幸格子文 花文 波食見(くわらんか手)	18c	240
8.7	16		調査区-1	縫隙	陶器	淡青色釉香炉	—	—	5.6	46.4	外:淡青色釉 内:野相馬	18c	26
8.8	17		調査区-1	縫隙	陶器	餅分瓶	—	—	4.3	54.6	灰釉・乳釉 大瓶相馬	18c	27
8.9	14		調査区-1	縫隙	陶器	瓶	—	—	—	17.2	灰釉 内:茎目 厚窓系	17c	28
8.10	15		調査区-1	縫隙	陶器	瓶	—	—	—	9.8	乳釉 内:茎目 美濃	17c?	29
8.11	Ke-2	調査区-1	縫隙	石製品	砾石	砾石	5.5	4.0	3.2	99.8	削り面(5面)		241
8.12	N-1	調査区-1	縫隙	陶製品	縛合 雜具	—	1.0	0.1	4.7	3.2cm残存	(ED) (後期?)	242	



1. A-1区調査区南壁土壌断面（北から）



2. A-2区調査区全景（南東から）



3. A-4区調査区全景（西から）



4. B-2区調査区全景（西から）



5. B-4区調査区全景（東から）



6. B-6区調査区全景（東から）



7. B-8区調査区全景（南から）



8. B-8区調査区全景（南から）

写真図版 1 試掘・確認調査（1）



1. B-7区調査区全景（北東から）



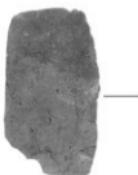
2. B-14区調査区全景（南西から）



3. B-15区調査区全景（北から）



1. 陶器・鉢 (I-1・A-2区)



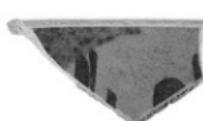
2. 砂石 (Kc-1・A-2区)



3. 土人形  
(P-1・A-4区)  
S=1/2



4. 磁器 (J-1・B-4区)



5. 陶器 (I-2・B-4区・SD1)



6. 磁器・香炉  
(I-6・B-7区)



7. 磁器・碗  
(I-7・B-7区)



10. 磁器・皿  
(J-2・B-7区)



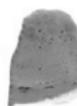
8. 陶器・壺鉢  
(I-4・B-7区)



9. 陶器・擂鉢  
(I-5・B-7区)



11. 砂石 (Kc-2・B-7区)



12. 煙管・雁首 (N-1・B-7区)

写真図版2 試掘・確認調査 (2) 各調査区出土遺物

## 第2章 平成26年度発掘調査（第1次調査）

### 第1節 調査概要

#### 1. 調査経過

本発掘調査は、平成26年7月28日に土壠を含む遺跡全体の計測作業から開始した。29日にブレハブ等を搬入し、30日から調査を行った。まず調査区内に土壠（SL1）に5箇所のトレンチを設定し、人力により土壠上の表土を掘削し、土壠の構築面と基本層の確認に努めた。8月4日から重機を用いて調査区内の表土掘削を調査区の土壠北側から行い、同時に調査地の外周にフェンスを設置した。7日に調査区北側の表土掘削および遺構検出が完了したが、遺構、遺物の出土はなかった。8日に土壠西側の表土掘削および遺構検出を行い、堀跡と水田耕作層および下層の河川堆積層を確認した。益休の後、8月18日から調査区の表土掘削を再開し、21日に終了した。22日から遺構検出作業を開始し、溝跡、土坑、小溝状遺構などが確認された。その際一部の遺構は土壠よりも古く、また遺構内に灰白色火山灰が堆積していることが確認された。9月1日から調査区内の土壠の計測を行った。5日に遺構検出作業が完了し、遺構検出状況の写真撮影を行い、8日から調査区の遺構の掘り下げを行った。10日から調査区内に測量用のグリッド杭の設置作業を行った。24日には土壠の構築土の掘り下げを行った。10月8日に普及啓発用のDVDの撮影を行った。10日には土壠下層を除き、遺構の掘削と計測がほぼ完了し、調査区全景の遺構完掘状況の写真撮影を行った。その後14日からの大雨のため調査区が冠水し、作業は1週間中止した。20日からは重機を用いての土壠の構築土の撤去を開始し、土壠下の遺構の検出作業を行った。24日に土壠下層の遺構の調査を終了し、現場での発掘調査は完了した。29日から調査区の埋め戻し作業およびフェンスの撤去を行った。11月7日に埋め戻しを含むすべての作業を終了した。

#### 2. 基本層序

今回の調査区内の基本層は、土壠を挟んだ東側と西側、北側で様相が異なっていることが確認された。これは本来の自然地形の違いから、土地の利用形態が異なっていたためと考えられる。この内調査区の東側からは基本層が大別で3層、細別で7層が確認された。（第9・12図）

I層は調査区全域に分布する、現地表面を覆う現表土・耕作土および旧耕作土で、3層に細分される。総じて粘性、しまりとも弱い。

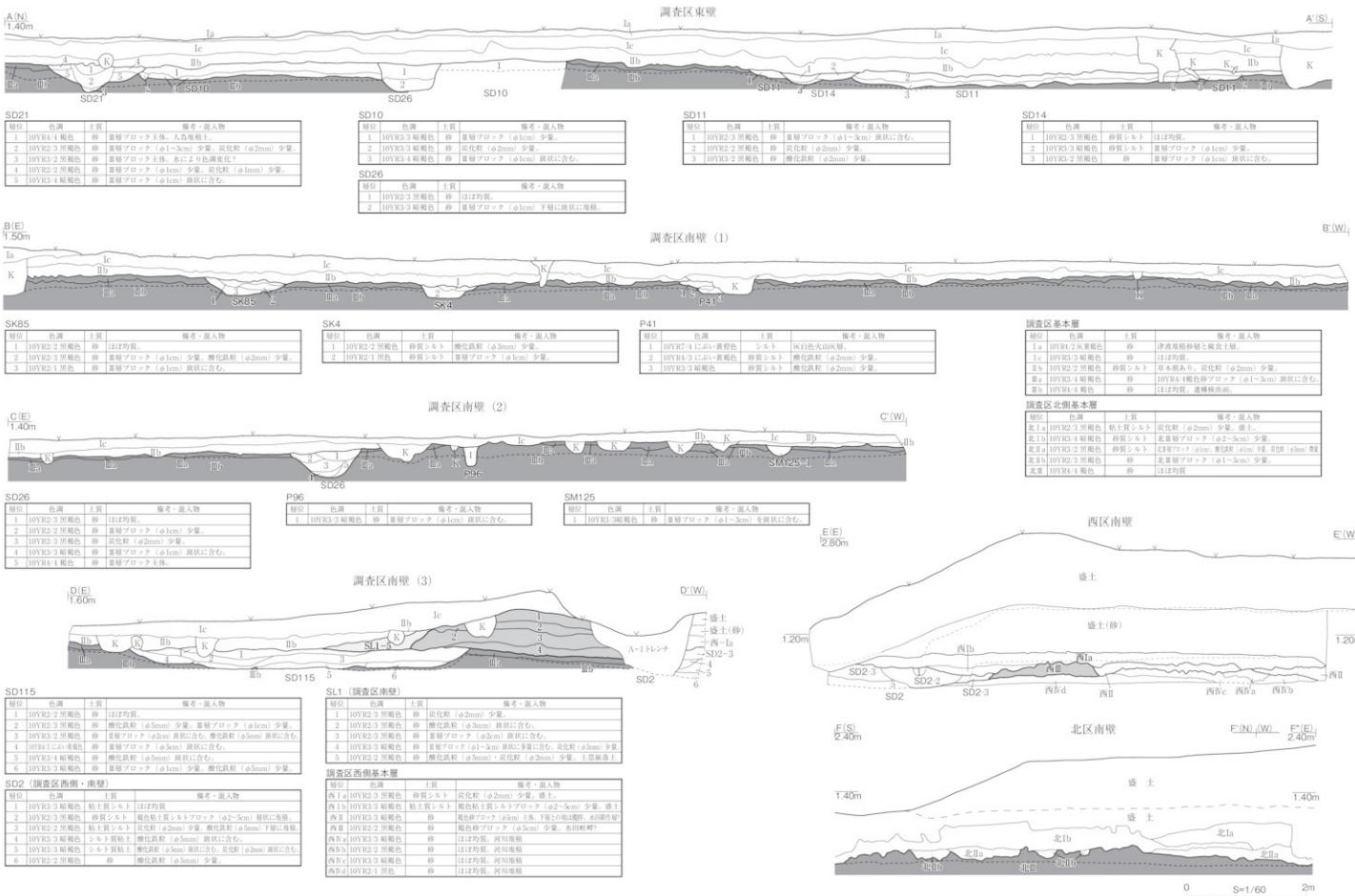
I a層：調査区の南側を除くほぼ全域で確認された、灰黄褐色の砂層である。特にSL1土壠の根部分や搅乱などにより複雑地形となっている箇所では厚く堆積しているのが確認された。下層との境に平成23年3月11日の東日本大震災に伴う津波により海浜からは運ばれてきたと思われる砂層が筋状に堆積しており、津波の砂と、震災以降に砂の上に堆積した腐食土層であると考えられる。

I b層：土壠の根部でのみ検出された暗褐色の砂層である。草木根が混入し、粘性、しまりとも弱い。津波被害以前の腐食土層であると考えられる。

I c層：調査区全域で確認された、黒褐色の砂質シルト層で、粘性としまりは他のI層より強い。旧耕作土の可能性がある。

II層は調査区の南側の一部を除くほぼ全域に分布する。I層下層の旧耕作土もしくは樹木根等により搅拌された層であると考えられる。2層に細分される。

II a層：SL1土壠付近にのみ分布する、にぶい黄褐色の砂層で、粘性は弱く、しまりもやや弱い。褐色砂ブロック



第9図 調査区壁土層断面図

を斑状に含んでおり、土壌構築土に近い傾向を示す。堆積状況から土壌上にかつて存在したイグネの樹木により、土壌構築土とⅡb層が搅拌された層であると考えられる。

Ⅱb層：土壌以外の調査区のはば全城で分布する黒褐色の砂質シルト層である。粘性、しまりとも他の基本層より強い。草木痕と炭化粒が混入する。畑の旧耕作土の可能性がある。

Ⅲ層は浜堤列を構成する砂層で、調査区の全城に分布する。2層に細分される。

Ⅲa層：暗褐色の砂層である。褐色の砂ブロックが斑状に混入しており、粘性は弱い。下層のⅢb層が搅拌を受けた旧耕作土層であると考えられる。厚さは約5cmと非常に浅いが、土壌の下層は比較的厚く残存している。

Ⅲb層：褐色の砂層である。ほぼ均質で混入物は少ない。粘性は弱く、しまりもⅢa層よりも弱い。本調査区の遺構検出面である。

調査区西側は、過去の造成により厚く盛土が堆積している。また最下層が河川堆積層で、その上層に水田耕作層と盛土が確認されている。基本層は大別で4層、細別で9層が確認された。その内の西Ⅱ・Ⅲ層が水田耕作に由来すると考えられる層である。

西Ⅰa層：現地表面下の砂による盛土の下層から検出された黒褐色の砂質シルト層である。粘性は強い。水田耕作後の盛土層であると考えられる。

西Ⅰb層：暗褐色の粘土質シルト層である。水田耕作後の盛土層であると考えられる。

西Ⅱ層：暗褐色の砂層で、褐色の砂ブロックを主体とし、下層との境は搅拌されている。水田耕作層であるものと考えられる。

西Ⅲ層：黒褐色の砂層で、粘性はやや強い。比較的最近の水田に伴う畦畔であるものと考えられる。

西Ⅳ層：a、c層は暗褐色、b層は黒褐色、d層は黒色で、西側に緩やかに傾斜しながら互層状に重なり合っている。いずれも砂層で均質であり混入物は少ない、粘性としまりは層により異なる。これらの状況から西Ⅳ層は河川堆積層であると考えられる。

調査区北側は過去の造成により盛土が厚く堆積しており、また造成の際の掘削が地表面から1.9mの深さまで及んでいる範囲もあった。基本層は大別で3層、細別で5層が確認されたが、基本的には調査区東側に類似している。

北Ⅰa層：黒褐色の粘土質シルト層である。炭化粒が少量混入する。土質は上層の盛土とは異なるものの、過去の造成工事の際の盛土の一部である。

北Ⅰb層：暗褐色の砂質シルト層である。北Ⅲ層ブロックが少量混入する。造成以前の旧表土もしくは耕作土であると考えられる。

北Ⅱa層：黒褐色の砂質シルトで、北Ⅲ層ブロックと酸化鉄粒、炭化粒が混入する。旧耕作土の掘り込みであると考えられる。

北Ⅱb層：黒褐色の砂層で、粘性、しまりとも北Ⅱa層よりも弱い。北Ⅲ層ブロックが混入する。旧耕作土の掘り込みであると考えられる。

北Ⅲ層：褐色のはば均質な砂層である。土壌東側のⅢb層に該当する浜堤列を構成する砂層であると考えられる。

## 第2節 検出遺構と出土遺物

### (1) 土壘・堀跡

#### SL1土壘（第9・10・12・13図）

本調査区を含む遺跡内で、現在も確認することができる地表顕在遺構である。本遺構に関しては表土掘削を行う前に現況の測量調査を行い、規模などを確認している。現地表面で確認された土壘の高さは約0.5～0.8mで、現在でも道路の西側と北側でその痕跡を確認することができる（別添図）。

調査区内ではB0～A0～A8・ZZ8グリッドにかけて土壘の構築土が検出された。方位は西側がほぼ真北方向を指し、東側はE2°・Nである。土壘構築土の幅は3.9～5.8mで、遺構検出面からの高さは約0.4～0.7mである。検出された長さは46.1mで、さらに調査区の東と南側に延びる。屈曲するA0グリッド付近で幅が広くなる。構築土は調査時に確認されたよりも高く構築されていたものと思われるが、遺構の上面には、震災前まではイグネが存在しており、その根掘乱により構築土が攪拌されていることが確認された。このイグネ上の樹木の位置は土壘の上に並んでいる梳亂の箇所に当たる。

構築土は基本層Ⅲa層上面から構築されており、また確認トレンチ範囲によって異なるものの、おおよそ2～5層に細分される。いずれの層も黒褐色の砂、もしくは砂質シルトに基本層Ⅲ層由来の褐色の砂のブロックが混入するが、部分的に褐色の砂が非常に多く混入する層も存在する。この層は何らかの形で土留めを行った痕跡の可能性がある。またこの土壘が崩落した土層も確認された。

後述するSD2堀跡はこの土壘に付随する堀跡であるものと考えられる。またSD115溝跡はこの土壘構築土の下層に延びていることが確認された。また古代の時期と考えられるSK136土坑や小溝状遺構群の一部も土壘構築土の下層から検出された。

遺物は大部分が破片資料ではあるものの、ヘラ切り調整が底面に施された須恵器の坏、ヘラ描記号が施された渥美焼の壺の頸部、土師質土器の皿（かわらけ）、壺の底部、近世陶磁器、近現代磁器、砥石などが検出面と基本層Ⅰ～Ⅱ層を中心に出土しており、今回はそのうちの12点を掲載した（第13図、写真図版II-1～8）。

出土した遺物の時期は近世が中心であるが古代、中世から、近現代にまで多岐にわたり、出土遺物から構築年代を決めるのは難しいが、構築時期は対応関係が考えられるSD26溝跡と同様、17世紀中葉～後葉と考えられる。

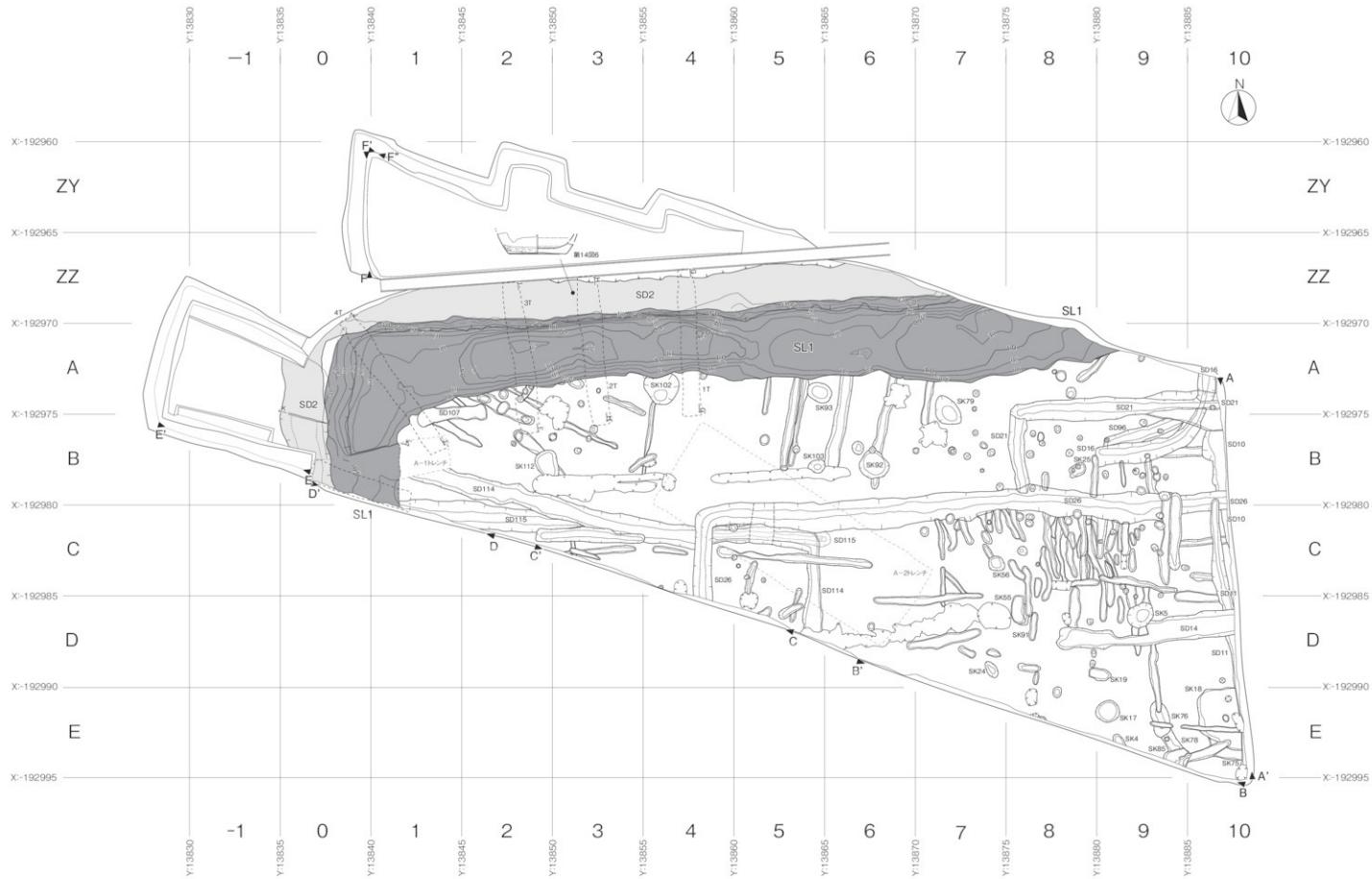
#### SD2堀跡（第9～12・14・15図）

SL1土壘に付随する形で発見された堀跡である。B0～A0～ZZ8グリッドにかけて検出された。方位は西側がほぼ真北方向を指し、東側は現代のU字型溝により溝の北側が確認されなかつたが、土壘同様E2°・Nであると考えられる。堀の幅は2.1～2.5mである。湧水のため遺構の完掘はできなかつたが、検出面からの深さは約70cmと考えられる。検出された長さは42.2mで、さらに調査区の東と南側に延びる。

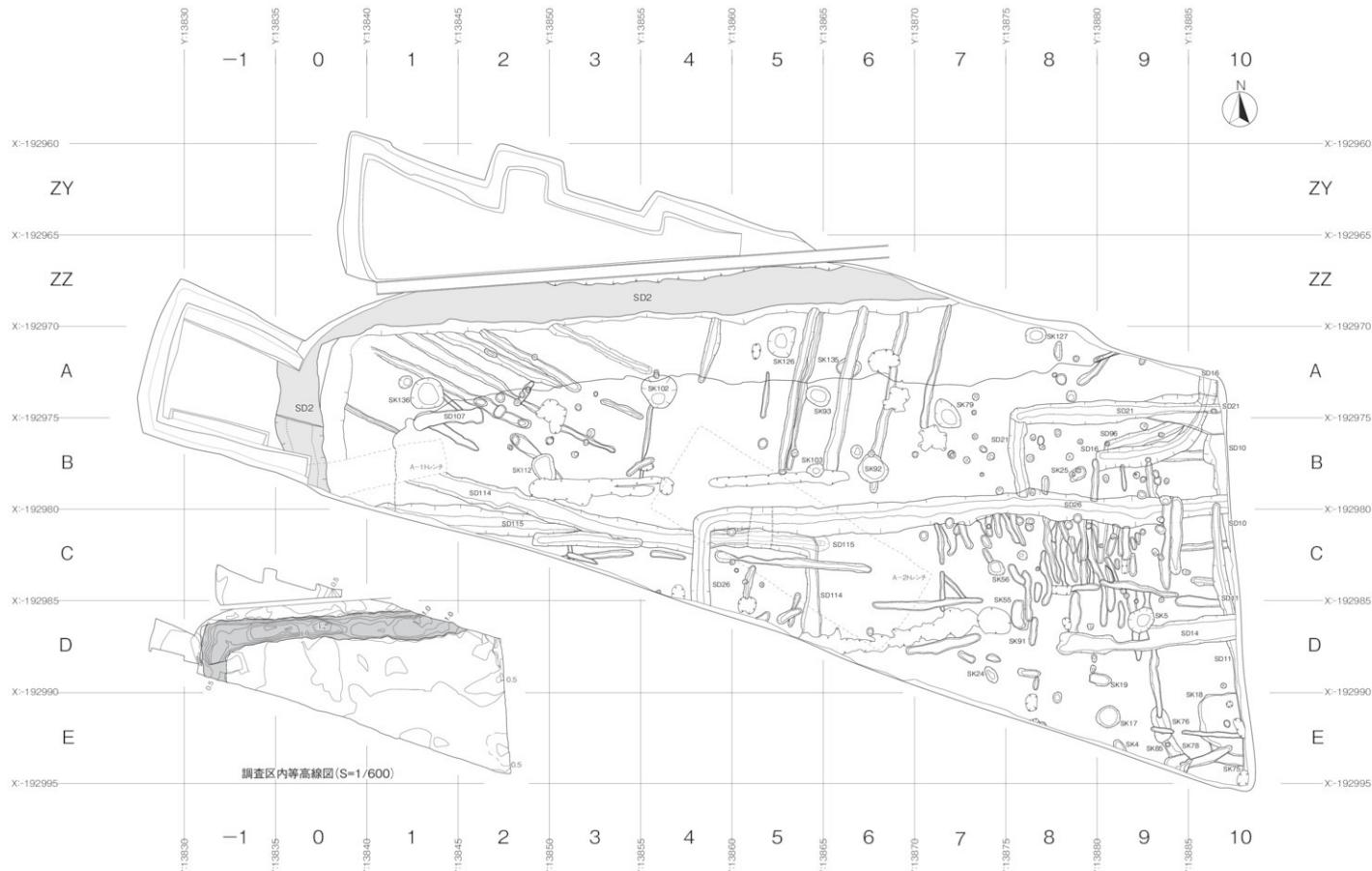
堆積土は調査区の西側では、1～4トレンチで確認された堆積土の様相とは若干異なり、暗褐色と黒褐色の粘土質シルトが主体を占め、酸化鉄粒が混入し6層に細分される。また盛土が直上まで存在し、西側の水田畦畔との対応から、上層は比較的最近まで使用されていた可能性がある。

また1～4トレンチ内の堀の堆積土は3層に細分される。堆積土はいずれも砂で、堆積土中に酸化鉄粒が混入する。この堆積土の上層にはSL1土壘からの落ち込みと考えられる層が確認され、SD2上層としてさらに細分した。今回出土した遺物の大部分はこの上層からの出土である。SD2上層も3層に細分されたが、下層の堆積土よりも粘性が少なく混入物も少ない。SD2上層はSD2堀跡が埋没した後に形成された層であると考えられる。

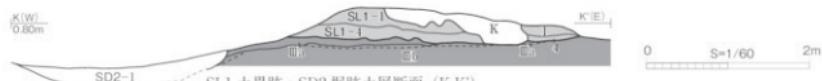
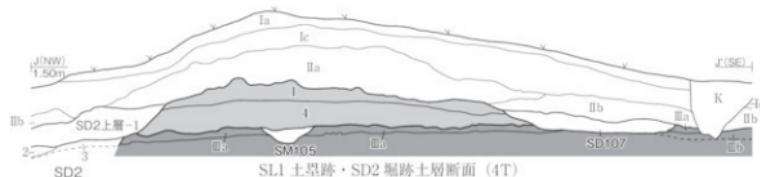
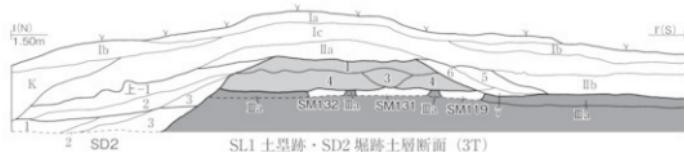
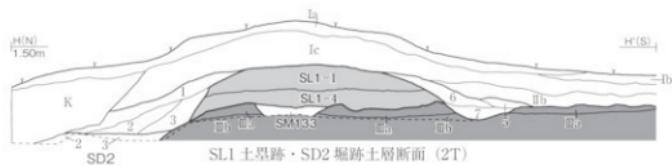
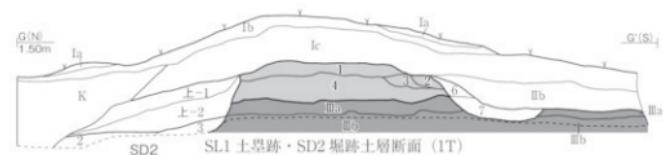
遺物は大部分が東側からの出土である。破片資料が多いものの、堆積土の上面および上層からを中心に土師質土



第10図 和田織部館跡遺構配置図1 (S=1/200)



第11図 和田織部館跡遺構配置図2 (S=1/200)



SL1 (1~5T)

層序	色調	土質	備考・混入物
1	10YR2-2 黒褐色	砂	重粘ブロック (φ1~2cm)、斑状に含む。
2	10YR2-2 黒褐色	砂質シルト	土壌 重粘ブロック (φ1cm)。
3	10YR2-2 黒褐色	砂	構造なし 重粘ブロック (φ1cm)、斑状に含む。
4	10YR2-2 黒褐色	砂質シルト	重粘ブロック (φ1cm) 少量、瓦灰粒 (φ2mm) 少量。
5	10YR2-2 黒褐色	砂	重粘ブロック (φ1cm) 少量。
6	10YR2-2 黒褐色	土壌	重粘ブロック (φ2mm) 少量。
7	10YR2-2 黒褐色	砂	重粘ブロック (φ1cm)、斑状に含む。

SD2 上層 (1~4T)

層序	色調	土質	備考・混入物
1	10YR3-4 紅褐色	粘土質シルト	
2	10YR2-3 黑褐色	砂	
3	10YR3-3 黑褐色	砂	酸化鉄ブロック (φ1cm) 少量。

SD2 (3~4T)

層序	色調	土質	備考・混入物
1	10YR3-3 紅褐色	砂	酸化鉄ブロック (φ1cm) 斑状に含む。
2	10YR3-3 黑褐色	砂	酸化鉄ブロック (φ1cm) 少量。
3	10YR2-2 黑褐色	砂	酸化鉄粒 (φ1cm)、炭化粒 (φ2mm) 少量。

SD2 (5T)

層序	色調	土質	備考・混入物
1	10YR2-3 黑褐色	砂	酸化鉄ブロック (φ2~5cm) 下層に斑状。

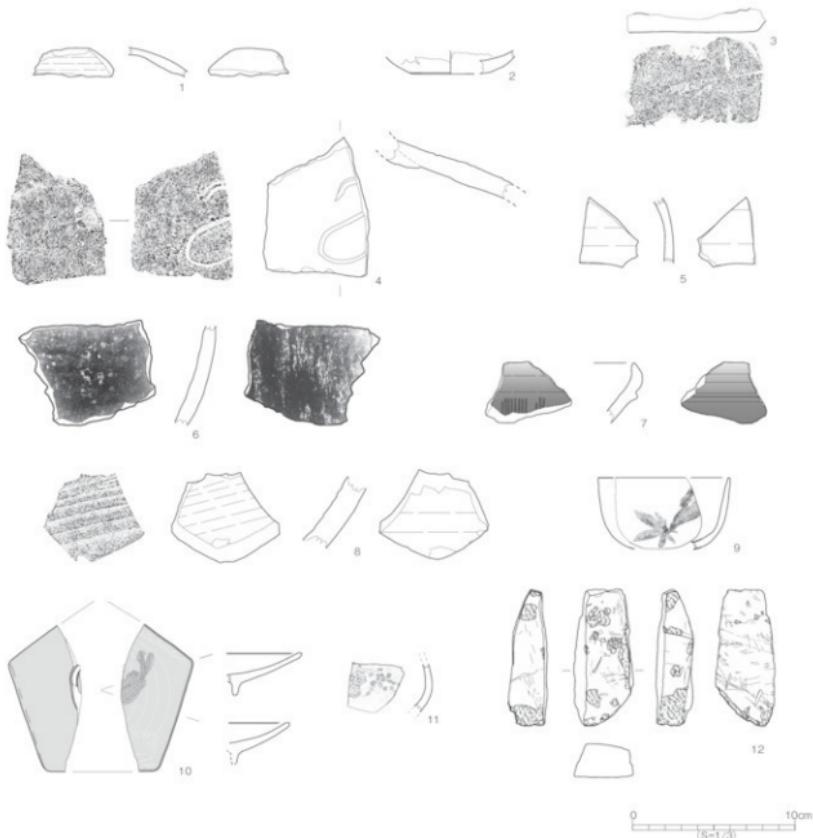
その他地槽

層序	色調	土質	備考・混入物
SL105, 10YR2-3 黑褐色	砂	小清灰道標、重粘ブロック (φ2~3cm) 斑状に含む。	
SD107, 10YR4-4 黄褐色	砂	重粘ブロック (φ2cm) を斑状に含む。	

層序	色調	土質	備考・混入物
SM119, 10YR2-3 黑褐色	砂	小清灰道標、重粘ブロック (φ1~3cm) 斑状に含む。	
SM131, 10YR2-3 黑褐色	砂	小清灰道標、重粘ブロック (φ1~3cm) 斑状に含む。	
SM132, 10YR2-3 黑褐色	砂	小清灰道標、重粘ブロック (φ1cm) を下層に少量含む。	
SM133, 10YR2-3 黑褐色	砂	小清灰道標、重粘ブロック (φ1cm) を斑状に含む。	

層序	色調	土質	備考・混入物
Ia	10YR4-2 黑黃褐色	砂	浄用粘土層と漬糞土層。
Ib	10YR2-3 黑褐色	砂質シルト	草木根多。
Ic	10YR3-3 黑褐色	砂	辺境。
Ba	10YR4-2.5 黑褐色	砂	10YR4-2.5 黑褐色 (φ1~3cm) 斑状に含む。Tの1号 sondage に観察。
Bb	10YR2-2 黑褐色	砂質シルト	草木根あり。炭化粒 (φ2mm) 少量。
Bc	10YR4-4 黄褐色	砂	10YR4-4 黄褐色 (φ1~3cm) 斑状に含む。
Bd	10YR4-4 黄褐色	砂	辺境。透鏡状出露。

第12図 SL1土壌・SD2堀跡土層断面図



第13図 SL1土壌出土遺物

単位はcm・g ( )の数値は後元値

No.	器種 番号	遺構名	層位	種類	器種	器高 長さ	口径 幅	底径 厚さ	重さ	備考・特記事項	年代・形式	写真 図版
13-1	E-1	SL1土壌	検出面	銀器	瓶	—	—	—	15.2	ロクロ	古代	II-I
13-2	G-2	SL1土壌	検出面	玉類質 土器	瓶(かわらけ)	—	—	(5.0)	7.7	ロクロ 内:指ナデ? 瓶:回転系切り?	中世?	
13-3	G-1	SL1土壌	I-II	玉類質 土器	瓶	—	—	(16.2)	90.0	なまこ型 瓶地不明	近世?	II-2
13-4	I-9	SL1土壌	I-II	陶器	壺?	—	—	—	86.8	外:ヘラ削り(外縁部削取り) 内:ナデ 滑溜着しい 瓶:へら削りのちナデ	12c (II形式?)	II-3
13-5	I-11	SL1土壌	検出面	陶器	壺?	—	—	—	10.8	志戸呂	18c?	
13-6	I-10	SL1土壌	陶器	壺	—	—	—	—	51.6	なまこ型 瓶地不明	近代?	
13-7	I-12	SL1土壌	検出面	陶器	壺鉢	—	—	—	15.7	鉢瓶 内:筋目各条带(非常に浅い) 在地	18c代	
13-8	I-24	SL1土壌	陶器	壺	—	—	—	—	75.0	鉢瓶 瓶地不明	近世?	II-4
13-9	J-6	SL1土壌	検出面	磁器	酒呑	(8.1)	—	—	28.6	染付(蓝色) 草花文 施口美濃	20c	II-6
13-10	J-4	SL1土壌	検出面	磁器	瓶	26.5	—	—	28.9	青釉染付 变形瓶 内:魚文 施口美濃	20c	II-7
13-11	J-5	SL1土壌	検出面	磁器	酒呑	—	—	—	7.8	外:草花文 龍甲文 施口美濃	20c	II-5
13-12	Ke-3	SL1土壌	検出面	石製品	砾石	8.45	3.55	2.2	90.2	側面(5面)	13.8	

器の皿（かわらけ）の底部、常滑の壺、青磁連弁紋碗、鉄軸搖鉢、波佐見碗、肥前の磁器皿や近現代の陶磁器、円裸を利用した砥石などが出土しており、今回はそのうちの12点を掲載した（第14・15図、写真図版II-7～9）。この中で素焼きの陶器甕I-15（第14図6）は、堆積土の第3層から出土しており、近世以降の年代であると考えられる。A0グリッドから東側のSD2塗跡は、これらの出土遺物の様相から、近世の時期に溝跡はある程度埋没し、その後近現代にいたるまでその上層に遺物が投棄されていったものと考えられる。

## （2）溝跡

今回の調査では10条の溝跡が検出された。これらの溝跡は区域を区画するための溝跡であると考えられる。

### SD10溝跡（第9・16・18図）

A10～D10グリッドにかけて検出された南北方向の溝跡である。方位はN-7°-Wで、断面形状はU字形を呈するものと考えられる。検出された横幅は約1.1mで、溝の深さは約20cm、長さは約6.3mで、調査区の東側に延びる。堆積土は3層に細分され、Ⅲ層ブロックと炭化粒が混入する。

SD21・26溝跡、SM67小溝状遺構F群と重複し、SD21・26、小溝状遺構F群よりも古く、SM67よりも新しい。遺物は出土していない。

### SD11溝跡（第9・16・18図）

B10～E10グリッドにかけて検出された南北方向の溝跡である。方位はN-8°-Wで、断面形状はやや崩れたV字形を呈する。溝の幅は約0.8m、深さ約30cm、検出された長さは約14.8mで、調査区の南と東側に延びる。堆積土は3層に細分され、Ⅲ層ブロックと炭化粒、酸化鉄粒が混入する。

SD14・26溝跡、SK18・75土坑、小溝状遺構F群と重複し、SD14溝跡よりも古く、他の遺構よりも新しい。遺物は出土していない。

時期はSD26溝跡よりも新しいことから、近世以降であると考えられる。

### SD14溝跡（第9・16図）

D8～D10グリッドにかけて検出された東西方向の溝跡である。方位はW-5°-Sで、断面形状は浅い皿形を呈する。溝の幅は約0.4～1.4m、深さ約30cm、検出された長さは約9.8mで、調査区の東側に延びる。堆積土は3層に細分され、Ⅲ層ブロックが混入する。

SD11溝跡、SK5土坑、小溝状遺構E群と重複し、SK5よりも古く、他の遺構よりも新しい。遺物は出土していない。時期は重複関係から、近世以降であると考えられる。

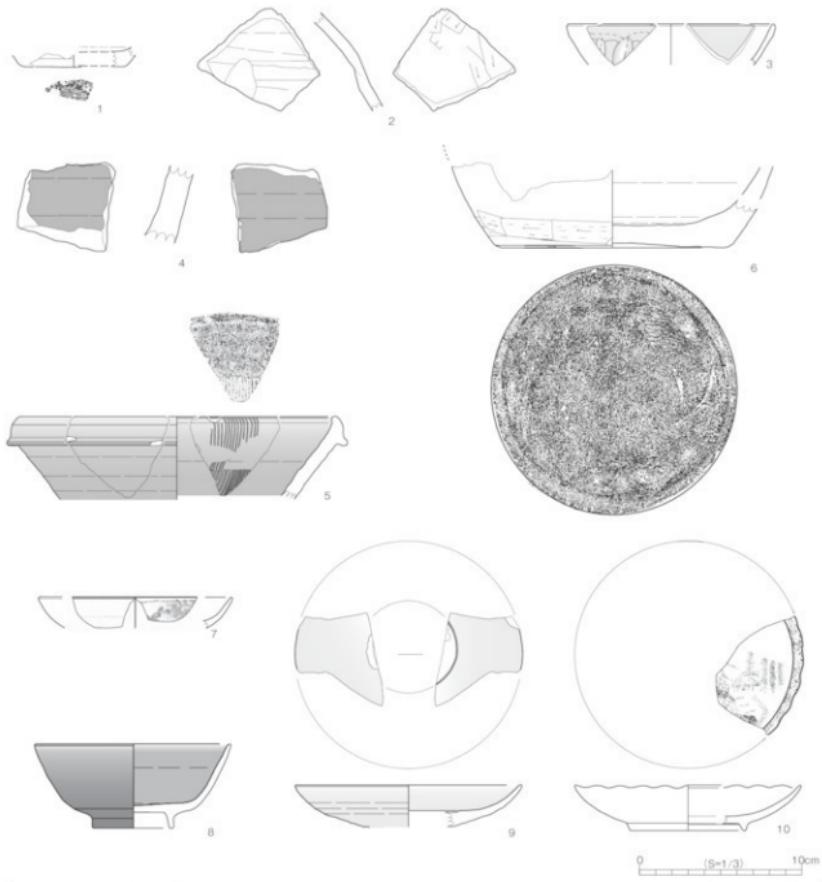
### SD16溝跡（第16・18図）

B9～A10グリッドにかけて検出された溝跡である。B9グリッドで北に大きく屈曲して調査区の北側に延びる。断面形状は皿形を呈する。溝の幅は約1.0m、深さ約20～30cm、検出された長さは約9.0mである。堆積土はいずれも砂層で2～5層に細分され、Ⅲ層ブロックと酸化鉄粒、焼土粒が混入する。

SD21・96溝跡、小溝状遺構F群と重複し、SD21、小溝状遺構F群よりも古く、他の遺構よりも新しい。

遺物は堆積土中から須恵器の瓶類の破片が出土している（第19図1）。

時期は重複関係から、近世以前であると考えられる。

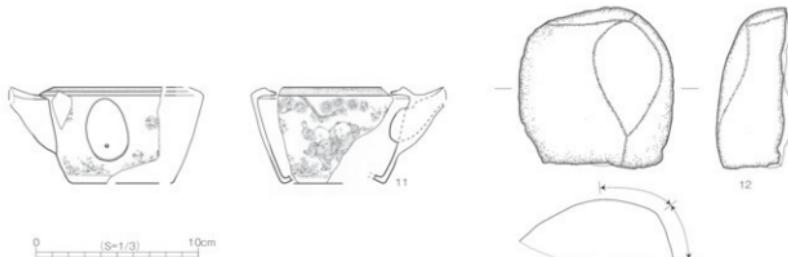


0 (S=1/3) 10cm

No.	登錄番号	遺構名	層位	種類	器種	部高 長さ	口径 幅	底径 厚さ	蓋S	備考・特記事項	年代・形式	写真 図版
141	G-3	SD2	上層	土師質土器	瓶(かわらけ)	—	—	(6.6)	6.0	ロクロ 瓶・回転条あり 外:ナデ 内:ナデ 輪筋痕・押さえ痕 空窓	中世	11-10
142	J-3	SD2		陶器	甕	—	—	42.0	—	—	—	—
143	J-7	SD2		陶器	縦分板甕	—	(32.8)	—	52	青磁 外:輪葉紋付 磁葉裏系 赤地不明	13c末~14c前葉	11-9
144	J-14	SD2		陶器	甕	—	—	67.8	—	真輪	13c末~14c前葉	—
145	J-22	SD2	上層	陶器	罐	—	(39.6)	—	41.0	真輪 内:口縁付近横ナデ 磁目 在地	13c以降	11-13
146	J-15	SD2	3層	陶器	甕	—	—	14.0	92.0	素焼き 外:ヘラケズリ 甕:回転条切引・外縁面取り 全体に剥離著しい 蓋付 内:墨跡 章絵文?	道後以降	11-14
147	J-11	SD2	上層	磁器	瓶(小瓶)	—	(12.0)	—	4.8	肥前	19c前葉	11-12
148	J-21	SD2	上層	陶器	甕	52	12.1	5.0	105.0	真輪	20c	11-16
149	J-8	SD2	検出面	陶器	瓶	—	(14.0)	—	24.8	甕付? 内:見込み枕の目輪ハギ 肥前(道後見)	17c後葉~前葉	11-11
14-10	J-9	SD2	上層	磁器	輪花瓶	24.5	(14.0)	(7.0)	28.0	内:鋼板軒口緑菊花文 磁葉家屋風景文	19c末~大正	11-15

第14図 SD2堤跡出土遺物(1)

単位はcm。g ( )の数値は仮元値



No.	登録番号	遺構名	層位	種類	器種	器高 厚さ	口径 幅	底盤 厚さ	蓋さ	備考・特記事項	年代・形式	写真 図版
151	J-10	SD2	複数	磁器	急須	5.9 (8.4)	(6.0)	327	実付 唐子文 单花文 肥前		20c	11-17
152	Kc-4	SD2		石製品	砾石	9.8	9.5	4.0	320	円錐 磨り面 (3面)		11-18

単位はcm・g ( )の数値は後元値

第15図 SD2塹跡出土遺物 (2)

#### SD21溝跡 (第9・16・18図)

B8～A8～A10・B10グリッドにかけて検出された溝跡である。A8グリッドで東に直角に屈曲して調査区の東側に延びる。方位は西側がW-4°-Nで、東側はE-2°-Nである。断面形状は、西側は皿形を呈し、東側は一段掘り窪んだ形状を呈している。溝の幅は約0.8～2.0m、深さ約20～35cm、検出された長さは約15.5mである。堆積土は3～5層に細分され、Ⅲ層ブロックと酸化鉄粒が混入する。また遺構の東側の最上層はⅢ層ブロックが主体で、これは人為堆積であると考えられる。

SD10・16・26・96溝跡と重複し、SD10・16・96よりも新しく、SD26より古いか、同時期の可能性が考えられる。遺物は堆積土中から須恵器の瓶類、かわらけ等の破片、砥石等が出土しており、3点を掲載している(第19図2～4、写真図版12-1・3)。

出土遺物から時期を判別するのは難しいが、SD26溝跡との関係から、17世紀中葉～後葉以降に埋没した可能性がある。

#### SD26溝跡 (第9・16～19図)

C4～C10グリッドにかけて検出された溝跡である。C4グリッドで東に直角に屈曲して調査区の東側と南側に延びる。方位は西側がN-2°-Eで、東側ではE-2°-Nである。断面形状は逆台形を呈し、溝の幅は約0.95～1.6m、深さ約40～50cm、検出された長さは約33.0mである。堆積土は2～5層に細分され、黒褐色、もしくは暗褐色の砂を主体に構成され、Ⅲ層ブロックと酸化鉄粒、炭化粒が混入する。

SD10・11・21溝跡と、また小溝状遺構E群、G群と重複し、SD10と小溝状遺構E群よりも新しく、SD11と小溝状遺構G群よりも古い。またSD26より古いか同時期の可能性がある。また溝の方位がSL1土壙の方位とほぼ平行していることから、同時期に作られた可能性がある。

遺物は堆積土中から、いずれも破片資料ながらも弥生土器の壺もしく壺の底部、須恵器の瓶類、壺、捏鉢、常滑の壺、かわらけ、岸窓の鉄軸が二重掛けされた鉢と擂鉢、および砥石等が出土しており、7点を掲載している(第19図5～7、第20図1～4、写真図版11-19・12-2・4～7)。

出土遺物で最も新しい時期ものは岸窓系の鉢で、17世紀中～後葉の時期のものである。また破片資料も含めこれ

以降の遺物は1点も出土しなかったことから、SD26は17世紀中葉～後葉以降に埋没した溝跡であると考えられる。

#### SD96溝跡（第16・18図）

B9グリッドで検出された東西方向の溝跡である。方位はE-17°-Nである。断面形状はやや緩やかなU字形を呈し、溝の幅は約0.7m、深さ約30cm、検出された長さは約4.5mで、調査区のさらに東側に延びる可能性がある。堆積土は3層に細分され、黒褐色、もしくは暗褐色の砂を主体に構成され、Ⅲ層ブロックと酸化鉄粒が混入する。

SD16・21溝跡と重複し、いずれの遺構よりも古い。

遺物は堆積土中から、須恵器の瓶類の破片が出土している（第20図5）。

時期は重複関係から、近世以前であると考えられる。

#### SD107溝跡（第12・17図）

A1～B2グリッドで検出された東西方向の溝跡である。方位はE-6°-Nである。断面形状は浅い皿形を呈し、溝の幅は約65cm、深さは約15cm、長さは約3.6mである。堆積土は褐色の砂で、Ⅲ層ブロックを斑状に含む。SL1土塁と同時期に掘削された可能性がある。遺物は出土していない。

#### SD114溝跡（第17・19図）

B1～C5グリッドで検出された溝跡である。C5グリッドで西には直角に屈曲して調査区の西側と南側に延び、SL1土塁付近まで延びるものと思われる。方位は西側でW-10°-Nで、南側ではN-1°-Eで、断面形状は浅い皿形を呈する。溝の幅は約0.60～1.1m、深さ約10～20cm、検出された長さは約25.9mで、調査区のさらに南側に延びるものと考えられる。堆積土は5層に細分され、黒褐色と暗褐色の砂を主体に構成され、Ⅲ層ブロックと酸化鉄粒が混入する。SD26・115溝跡と重複し、SD26よりも古く、SD115よりも新しい。

遺物は堆積土中から、須恵器の捏鉢の破片が出土している（第20図6、写真図版12-8）。

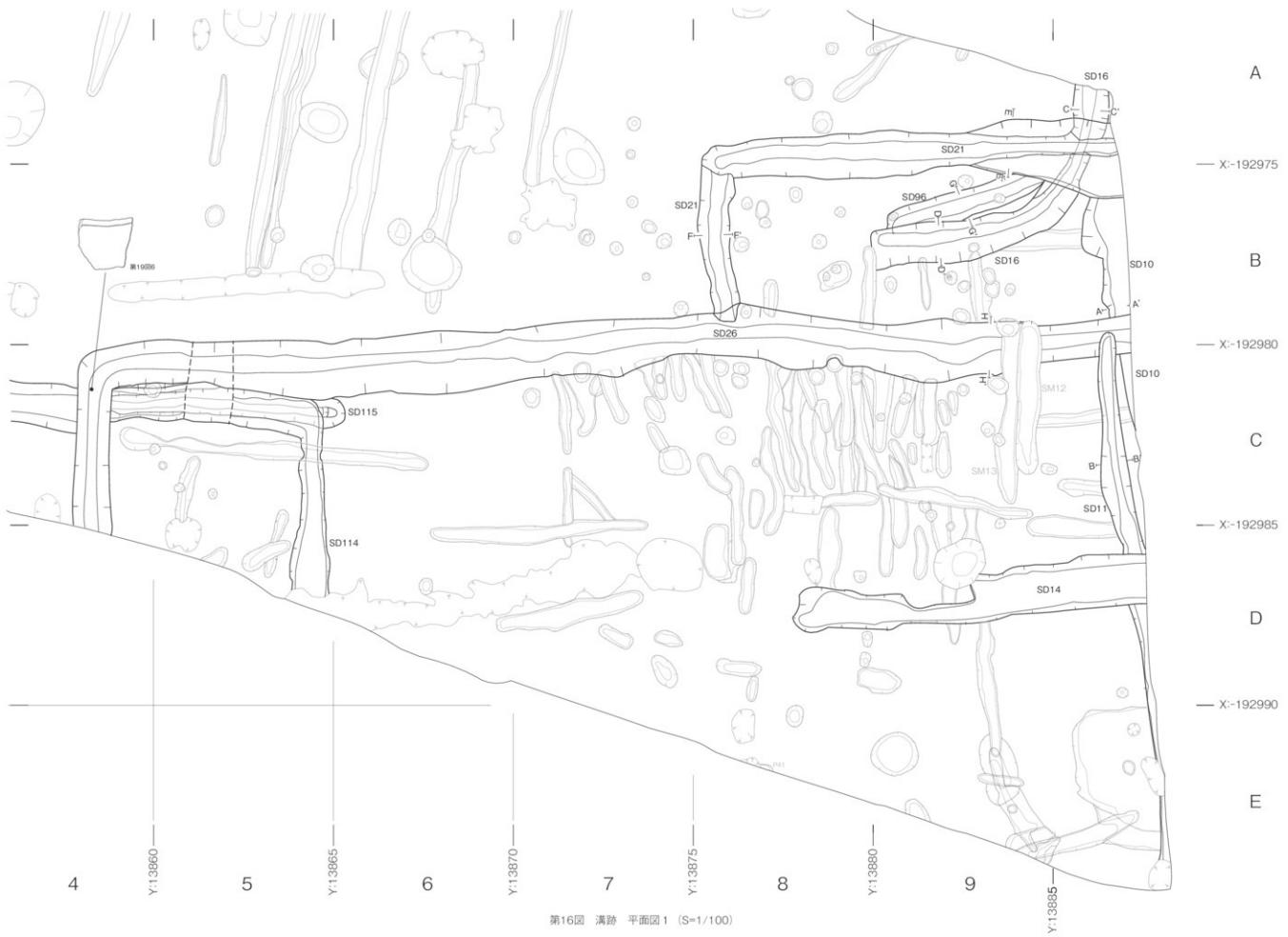
時期は重複関係から、近世以前であると考えられる。

#### SD115溝跡（第17・19図）

C1～C5グリッドで検出された東西方向の溝跡である。C5グリッドの先端部分で階段状に立ち上がる。方位はW-3°-Nで、断面形状は皿形を呈する。溝の幅は0.70～1.3m、深さ約30～35cm、検出された長さは20.8mで、調査区の西側に延びる。堆積土は2～6層に細分され、黒褐色と暗褐色の砂を主体に構成され、Ⅲ層ブロックと酸化鉄粒が混入する。SL1土塁、SD26・114溝跡と重複し、いずれの遺構よりも古い。

遺物は堆積土中から、須恵器の壺の底部の破片と、円礫を利用した砥石が出土している（第20図7・8・写真図版12-9）。

SL1土塁とSD26溝跡よりも古いためから、時期は近世以前であると考えられる。



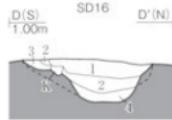
第16図 溝跡 平面図1 (S=1/100)





SD10

層位	色調	土質	参考・既人物
1	10YR2-2 黒褐色	砂	直層ブロック ( $\phi 1cm$ ) 少量。
2	10YR4-3 にぶ・黄褐色	直層ブロック 1体。	

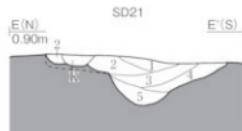


SD16

層位	色調	土質	参考・既人物
1	10YR2-2 黒褐色	砂土粒 ( $\phi 3mm$ ) 少量。	
2	10YR4-3 にぶ・黄褐色	直層ブロック 1体。	

SD16

層位	色調	土質	参考・既人物
1	10YR3-2 黑褐色	砂化鉄粒 ( $\phi 2mm$ ) 少量。	
2	10YR2-2 黒褐色	直層ブロック ( $\phi 2~3cm$ ) 少量。直層ブロック ( $\phi 2~3cm$ ) 領状に含む。	
3	10YR3-4 黄褐色	砂	直層ブロック 1体。
4	10YR2-4 に黄褐色	砂	

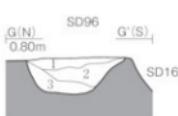


SD21

層位	色調	土質	参考・既人物
1	10YR4-6 棕褐色	砂層ブロック 1体。人為的堆積土。	
2	10YR3-4 始褐色	砂層ブロック ( $\phi 1~2cm$ ) 領状に含む。人為的堆積土。	
3	10YR3-4 始褐色	砂層ブロック ( $\phi 1cm$ ) 少量。人為的堆積土。	
4	10YR2-4 黑褐色	砂層ブロック ( $\phi 1~3cm$ ) 多量に領状に含む。人為的堆積土。	
5	10YR4-3 にぶ・黄褐色	直層ブロック 1体。	

SD21

層位	色調	土質	参考・既人物
1	10YR2-3 黑褐色	直層ブロック ( $\phi 1cm$ ) 下部との境に領状に堆積。	
2	10YR3-3 始褐色	直層ブロック ( $\phi 1cm$ ) 少量。	
3	10YR4-4 棕色	直層ブロック 1体。	



SD96

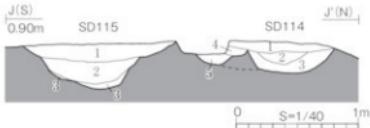
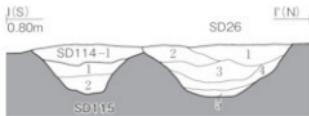
層位	色調	土質	参考・既人物
1	10YR2-3 黑褐色	砂層ブロック ( $\phi 1cm$ ) 少量。	
2	10YR3-3 始褐色	砂層ブロック ( $\phi 1cm$ ) 領状に含む。砂化鉄粒 ( $\phi 2mm$ ) 少量。	
3	10YR2-2 黑褐色	砂層ブロック ( $\phi 1~3cm$ ) 領状に含む。砂化鉄粒 ( $\phi 1mm$ ) 少量。	

SD26

層位	色調	土質	参考・既人物
1	10YR2-3 黑褐色	直層ブロック ( $\phi 1cm$ ) 少量。	
2	10YR3-3 始褐色	砂化鉄粒 ( $\phi 2mm$ ) 少量。直層ブロック ( $\phi 3cm$ ) 少量。	
3	10YR3-4 始褐色	直層ブロック 1体。	

0 S=1/40 1m

第18図 溝跡 挖面図 (1)



SD26

層位	色調	土質	備考・断面物
1	10YR2/3 黒褐色	砂	酸化鉄粒 ( $\phi 3mm$ ) 少量。
2	10YR3/4 嫌褐色	砂	酸化鉄粒 ( $\phi 1cm$ ) 少量。炭化粒 ( $\phi 2mm$ ) 少量。
3	10YR3/3 嫌褐色	砂	酸化鉄ブロック ( $\phi 1cm$ ) 少量。
4	10YR3/4 嫌褐色	砂	直層ブロック ( $\phi 1cm$ ) 順次に含む。
5	10YR4/4 黄褐色	砂	直層ブロック主体。

SD114

層位	色調	土質	備考・断面物
1	10YR3/3 嫌褐色	砂	炭化粒 ( $\phi 2mm$ ) 少量。
2	10YR3/4 嫌褐色	砂	直層ブロック ( $\phi 1\sim 2cm$ ) 下部に少量。
3	10YR3/3 嫌褐色	砂	直層ブロック ( $\phi 1cm$ ) 疊式に含む。
4	10YR3/3 嫌褐色	砂	炭化粒 ( $\phi 2mm$ ) 少量。直層ブロック ( $\phi 1cm$ ) 順次に含む。
5	10YR3/2 黒褐色	砂	直層ブロック ( $\phi 1cm$ ) 少量。

SD114

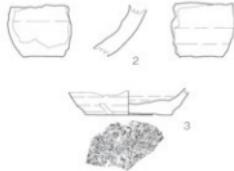
層位	色調	土質	備考・断面物
1	10YR2/3 黒褐色	砂	直層ブロック ( $\phi 1cm$ ) 少量。酸化鉄粒 ( $\phi 2mm$ ) 少量。

SD115

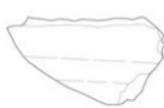
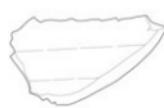
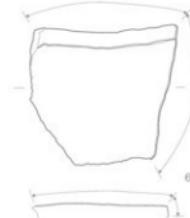
層位	色調	土質	備考・断面物
1	10YR2/3 黒褐色	砂	10YR均質。
2	10YR2/3 黒褐色	砂	直層ブロック ( $\phi 1cm$ ) 少量。
3	10YR4/4 黄褐色	砂	直層ブロック主体。酸化鉄粒 ( $\phi 2\sim 4mm$ ) 順次に含む。



SD16 溝跡出土遺物



SD21 溝跡出土遺物



0 [6-1-3] 10cm

SD26 溝跡出土遺物

第19回 溝跡断面図 (2)・出土遺物 (1)